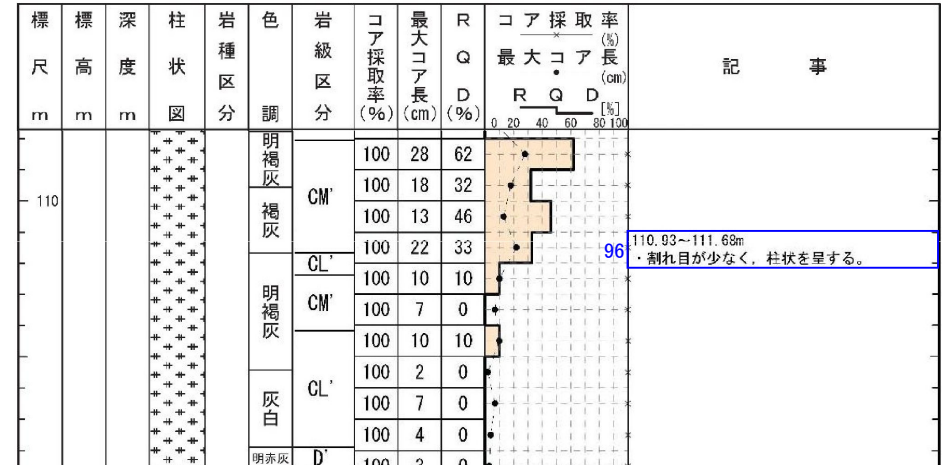
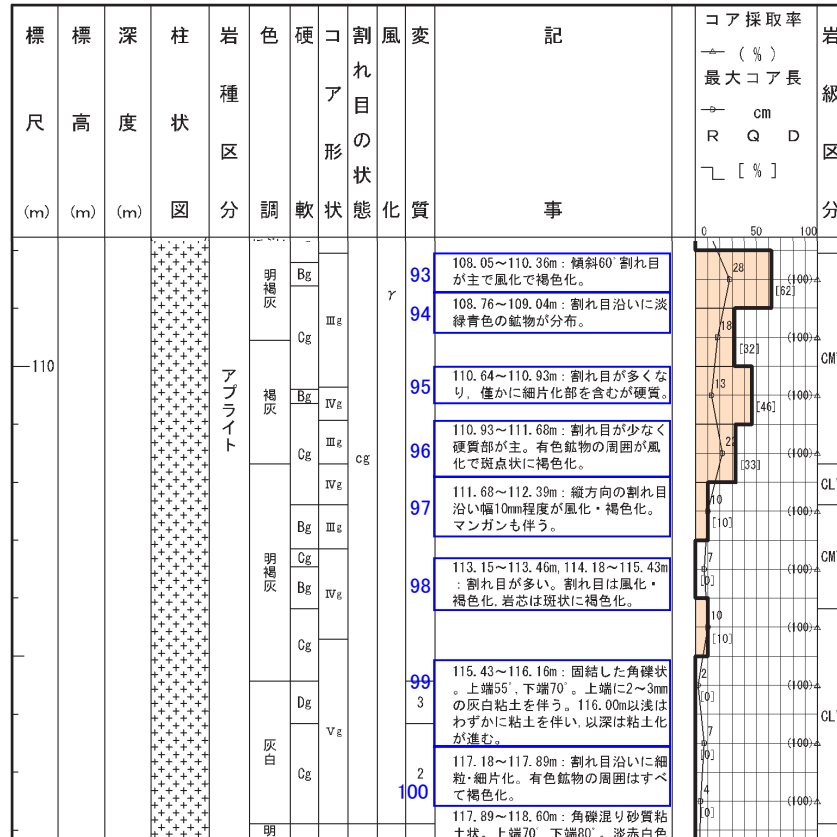


報告書作成用柱状図
(H26年12月)

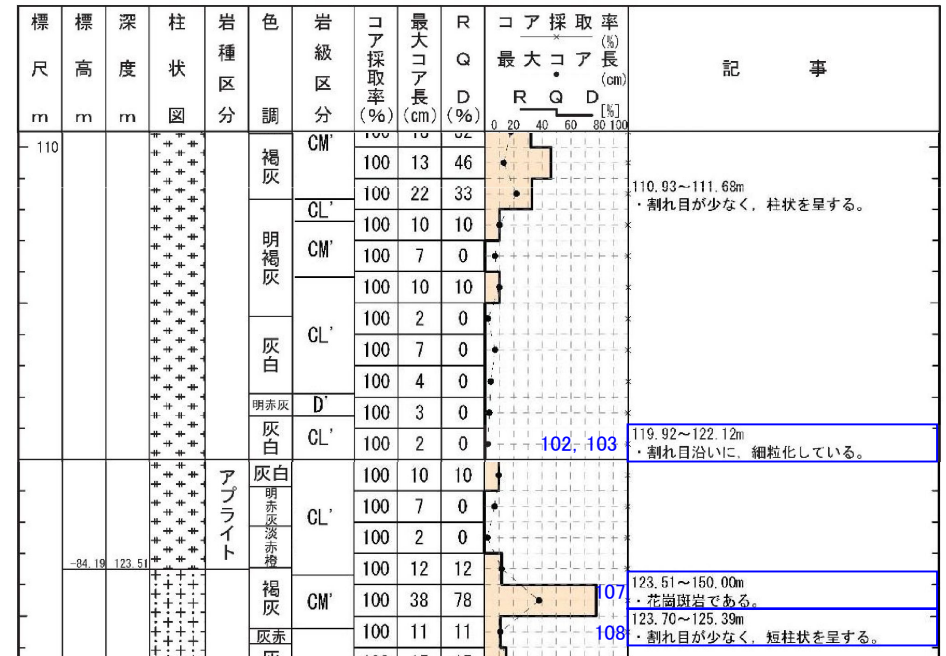
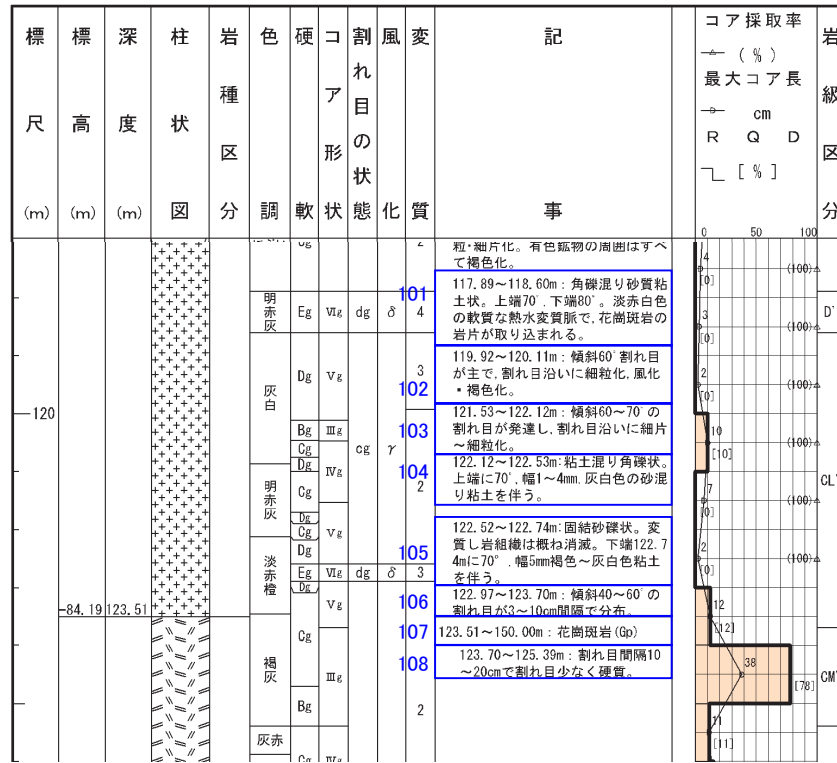
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
93	・割れ目の傾斜, 割れ目沿いの褐色化については, 補足的なものであるため削除。
94	・割れ目沿いの鉱物晶出については, 補足的なものであるため削除。
95	・硬軟や割れ目の発達程度については, RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。
96	・割れ目の発達程度については, “コア形状”欄に基づき柱状と記載。 ・硬軟については, 岩級区分に含めて示しているため削除。 ・風化程度については, 当該区間の周囲と明瞭な差が認められないため削除。
97	・割れ目沿いの風化・褐色化, マンガンについては, 補足的なものであるため削除。
98	・割れ目の発達程度については, RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目沿いの風化・褐色化については, 補足的なものであるため削除。
99	・上端に粘土を挟在するが, 周囲の岩盤の劣化が認められないことから削除。 ・角礫状の区間は, 掘削時の機械割れと判断し削除。 ・116m以深の粘土は, 連続性や直線性に乏しく, 周囲の岩盤の劣化が認められないことから削除。
100	・割れ目沿いの細粒・細片化については, 掘削時の機械割れと判断し削除。

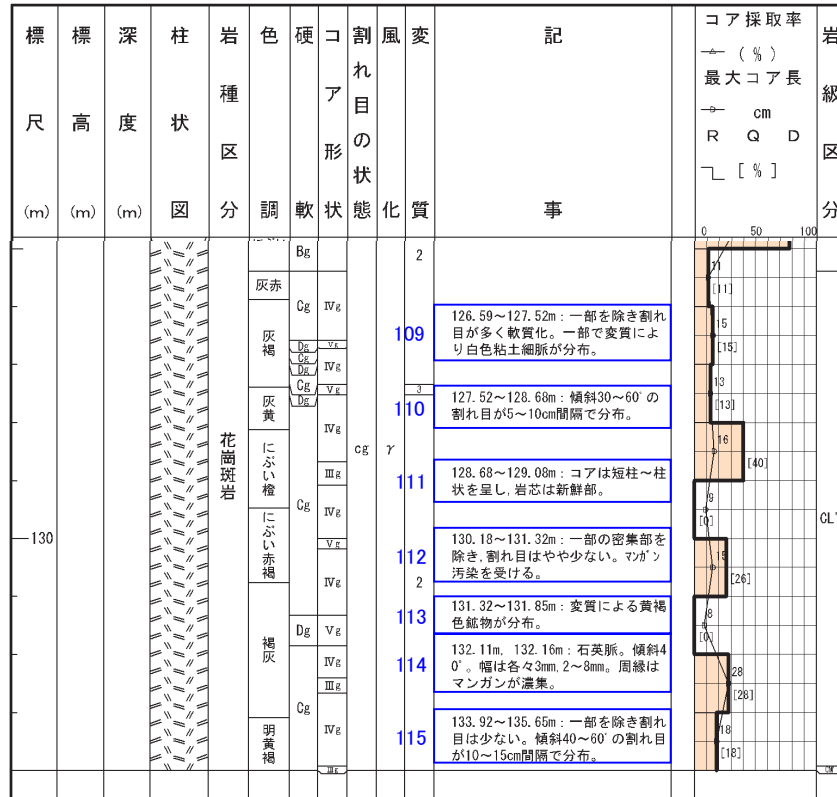
報告書作成用柱状図
(H26年12月)

申請書用柱状図

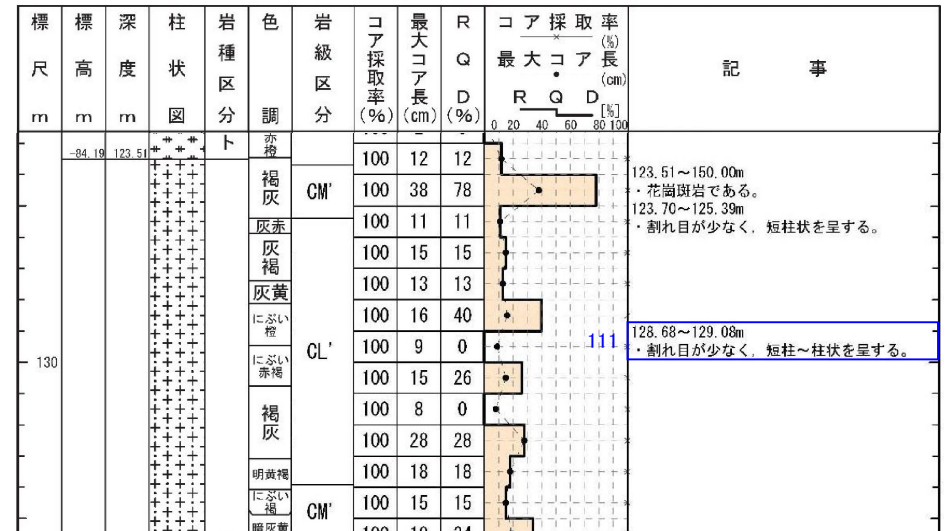


記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
101	・網目状に粘土脈が分布しているが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
102, 103	・割れ目沿いの風化、褐色化については、補足的なものであるため削除。
104, 105	・粘土混り角礫状及び固結砂礫状を呈し、一部で粘土を挟在するが、粘土が系統的でなく、連続性や直線性に乏しいことから削除。
106	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
107	・変更なし
108	・割れ目の発達程度については、“コア形状”欄に基づき短柱状と追記。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)



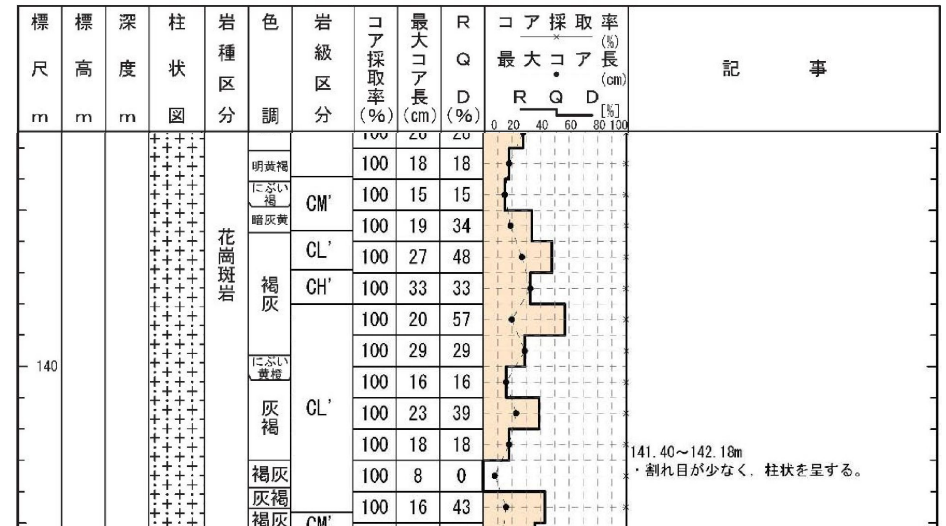
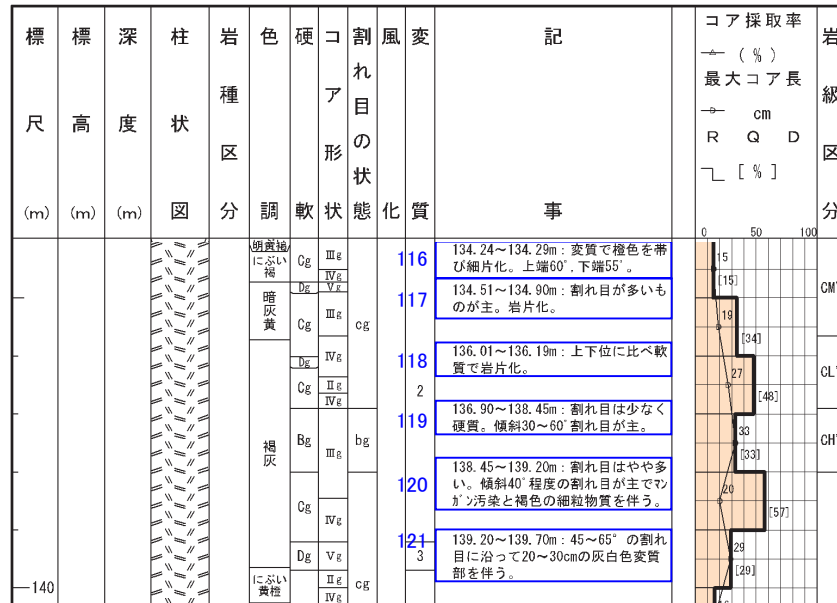
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
109	・硬軟や割れ目の発達については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・一部に粘土細脈を伴うが、系統的でなく連続性や直線性に乏しいことから削除。
110	・割れ目の発達については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
111	・風化については、岩級区分に含めて示しているため削除。
112	・割れ目の発達については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・マンガン汚染については、補足的なものであるため削除。
113	・鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
114	・石英脈、マンガン濃集については、補足的なものであるため削除。
115	・割れ目の発達については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。

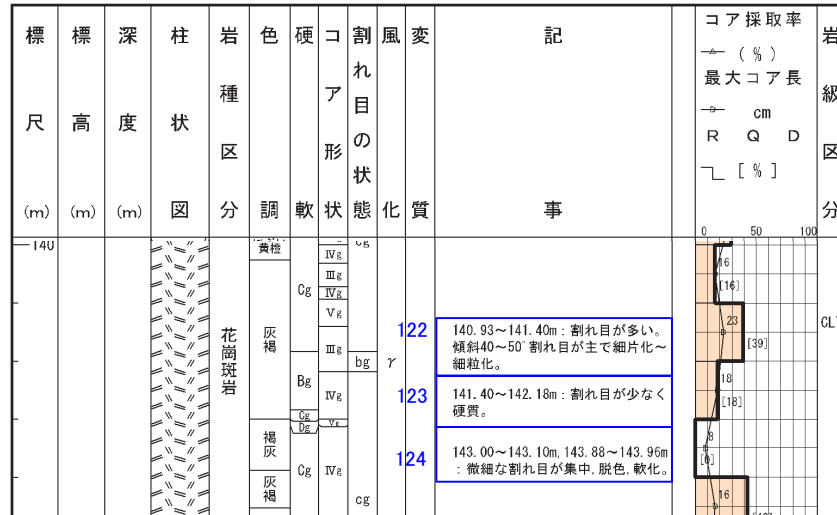
報告書作成用柱状図
(H26年12月)

申請書用柱状図

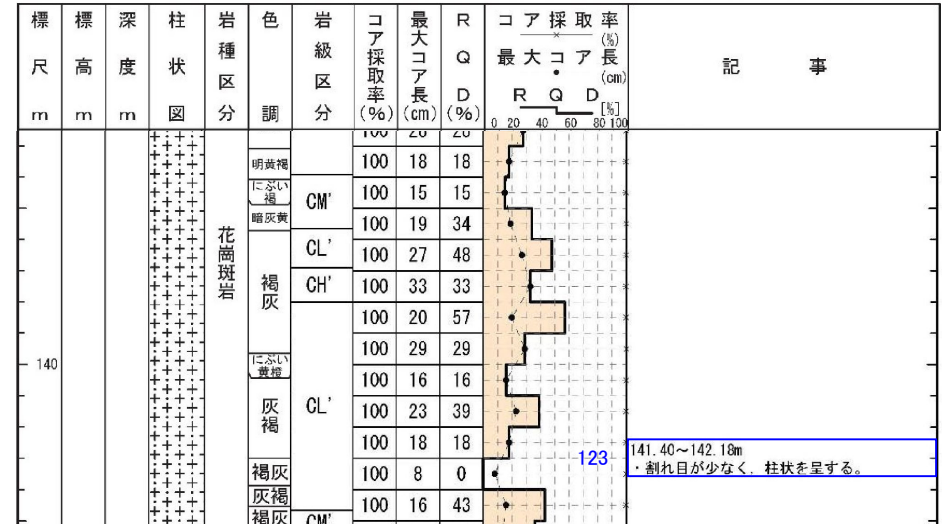


記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
116	・細片化しているが、周囲の岩盤と明瞭な差が認められないことから削除。 ・色調については、補足的なものであるため削除。
117	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
118	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
119	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
120	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目沿いのマンガン汚染については、補足的なものであるため削除。 ・割れ目に細粒物質を挟むが、周囲の岩盤と明瞭な差が認められないことから削除。
121	・割れ目沿いに変質劣化するが、粘土等の系統的な配列が認められず、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)

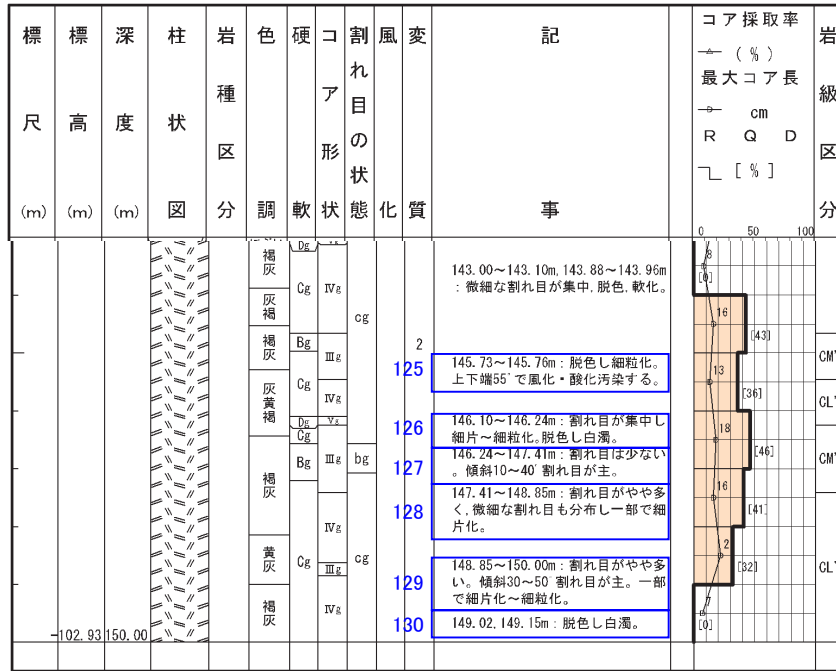


申請書用柱状図

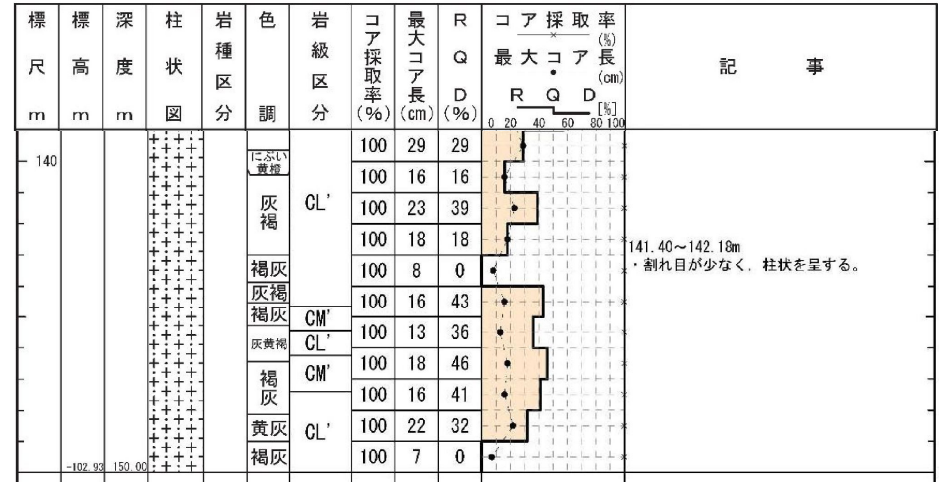


記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
122	<ul style="list-style-type: none"> 割れ目の発達については、RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。 割れ目沿いの細片~細粒化については、掘削時の機械割れと判断し削除。
123	<ul style="list-style-type: none"> 割れ目の発達については、“コア形状”欄に基づき柱状と記載。 硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。
124	<ul style="list-style-type: none"> 硬軟や割れ目の発達については、RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。 脱色については、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年12月)



申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年12月)⇒申請書用柱状図
125	・細粒化するが, 周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
126	・割れ目の発達については, RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。 ・白濁については, 風化・変質に関する補足的なものであるため削除。
127	・割れ目の発達については, RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。
128	・割れ目の発達については, RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。 ・一部で細片化しているが, 周囲の岩盤と明瞭な差が認められないことから削除。
129	・割れ目の発達については, RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。 ・一部で細片~細粒化しているが, 周囲の岩盤と明瞭な差が認められないことから削除。
130	・白濁については, 風化・変質に関する補足的なものであるため削除。

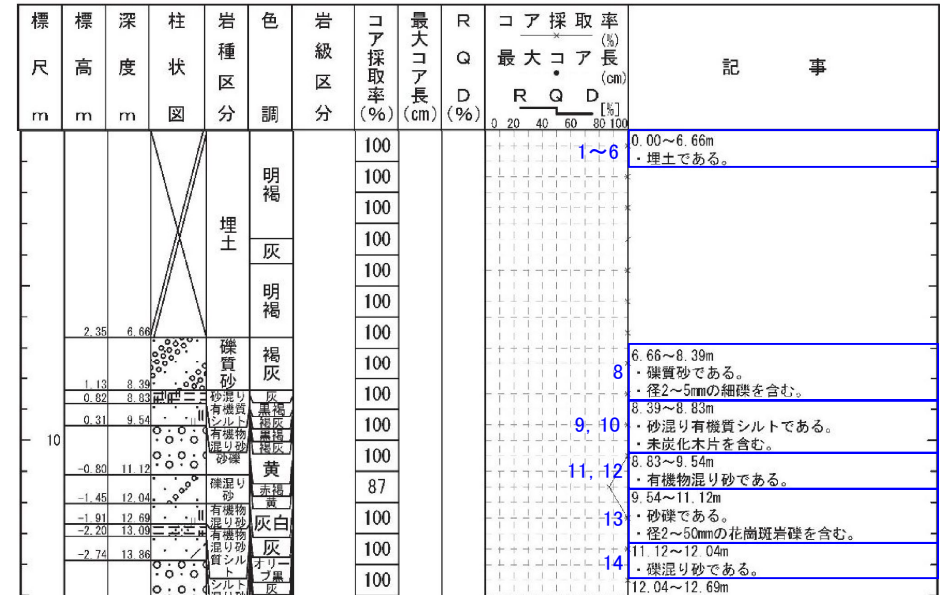
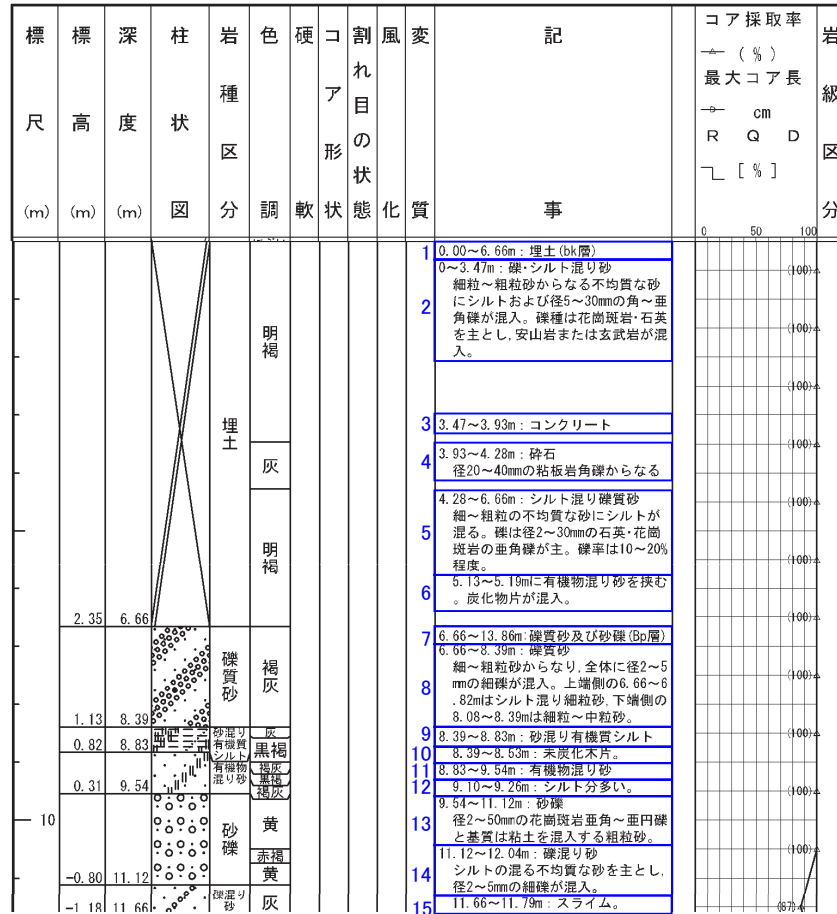
余白

H24-B14-2

余白

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

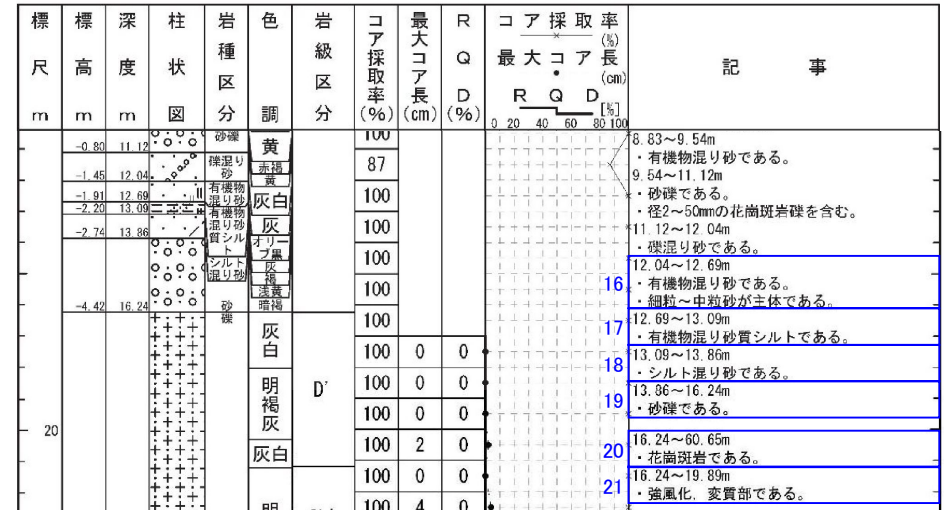
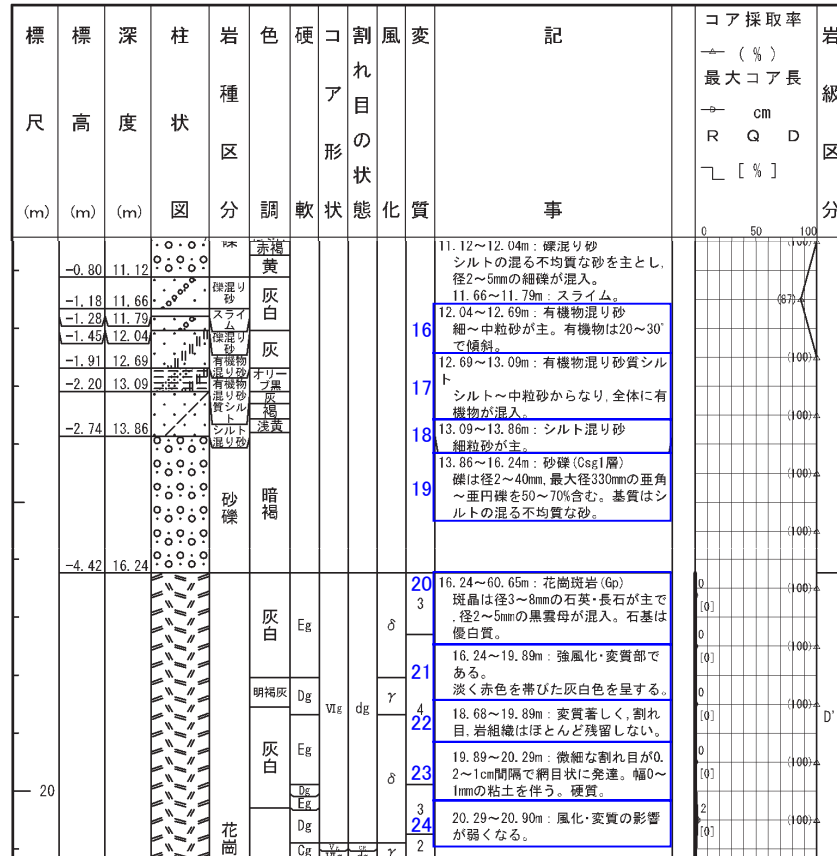
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
1~6	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。
7	・区間毎の性状を個別に記載しているため、礫質砂及び砂礫とのまとめ書きについては削除。
8	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。 ・周囲に比べ礫の含有量が多く、目立つことから、礫の特徴として、粒度、礫径を記載。
9, 10	・変更なし
11, 12	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。
13	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。 ・周囲に比べ含まれる礫が大きく、目立つことから、礫の特徴として、礫径、礫種を記載。
14	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。
15	・スライム区間については、幅が狭いことから、上位、下位の礫混じり砂状部に含めて削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

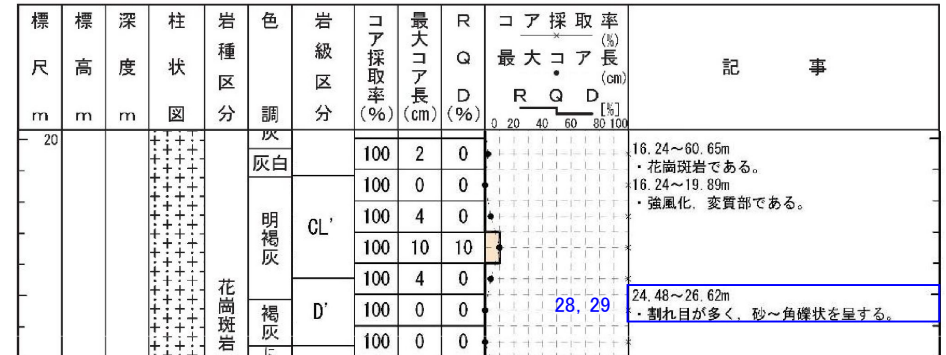
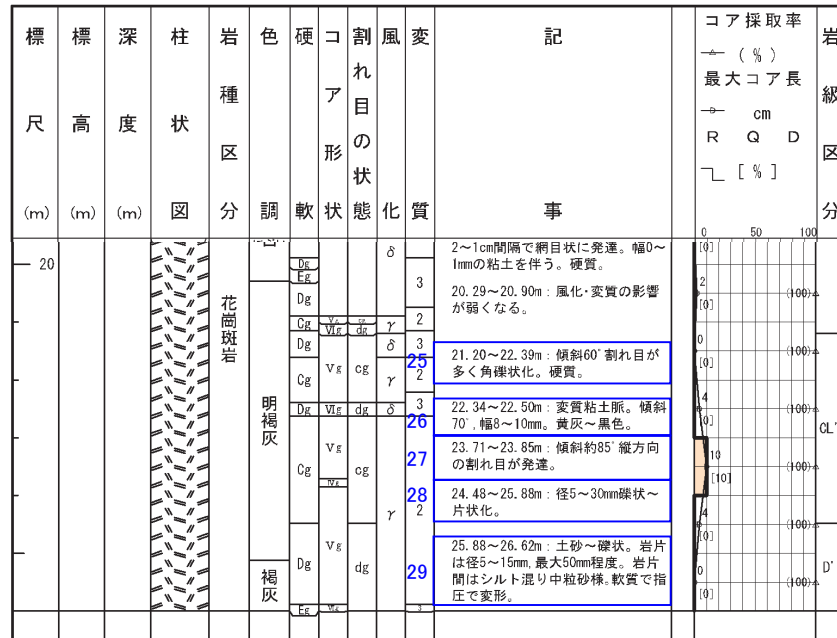
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
16	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。 ・上位層との境界付近では、粒度の違いが見かけ上顕著ではないため、上位層と区別できる特徴として、細粒～中粒砂が主体であることを記載。
17	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。
18	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。
19	・堆積物の記載は、埋土、砂礫等の性状を示すこととし、“岩種区分”欄に対応した層相名を記載。
20	・一般的な岩相であり、石基及び斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間ではないため削除。
21	・色調については、補足的なものであるため削除。
22	・変質の程度については、当該区間の周囲と差異が認められないことから削除。
23	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・一部に粘土を挟在するが、系統的でなく連続性や直線性に乏しいことから削除。
24	・変質の程度については、当該区間の周囲と差異が認められないことから削除。

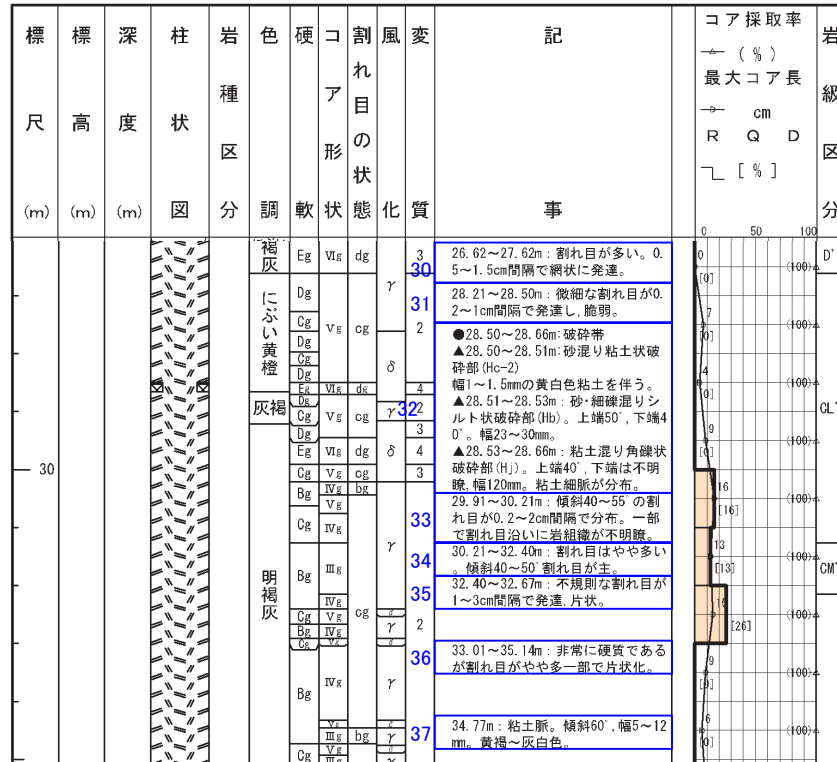
報告書作成用柱状図
(H26年9月)

申請書用柱状図

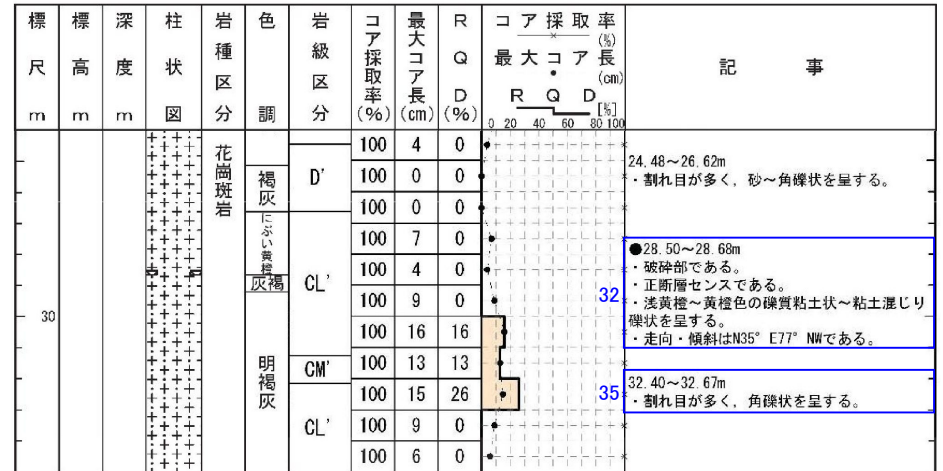


記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
25	・硬軟や割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
26	・変質粘土脈を挟在するが、連続性に乏しいことから削除。
27	・割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
28, 29	・“コア形状”欄に基づき砂状~角礫状と記載。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

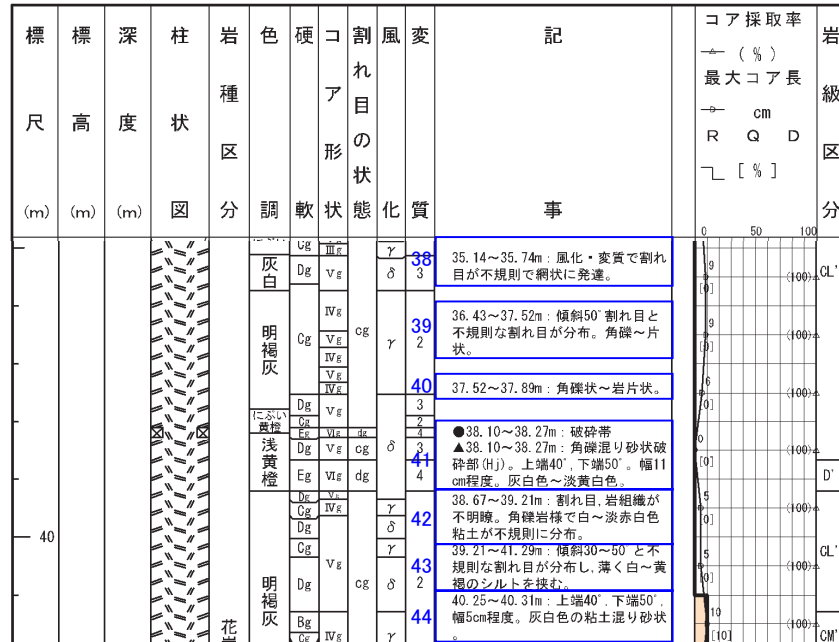


申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
30, 31	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
32	・色調、粒度について、申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破碎部の再観察の結果に基づき記載。 ・下端深度28.66m→28.68m※2、※4 ・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破碎部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため削除。
33	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
34	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
35	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
36	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
37	・粘土を挟在するが、周囲の岩盤に同方向の劣化が認められないことから削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

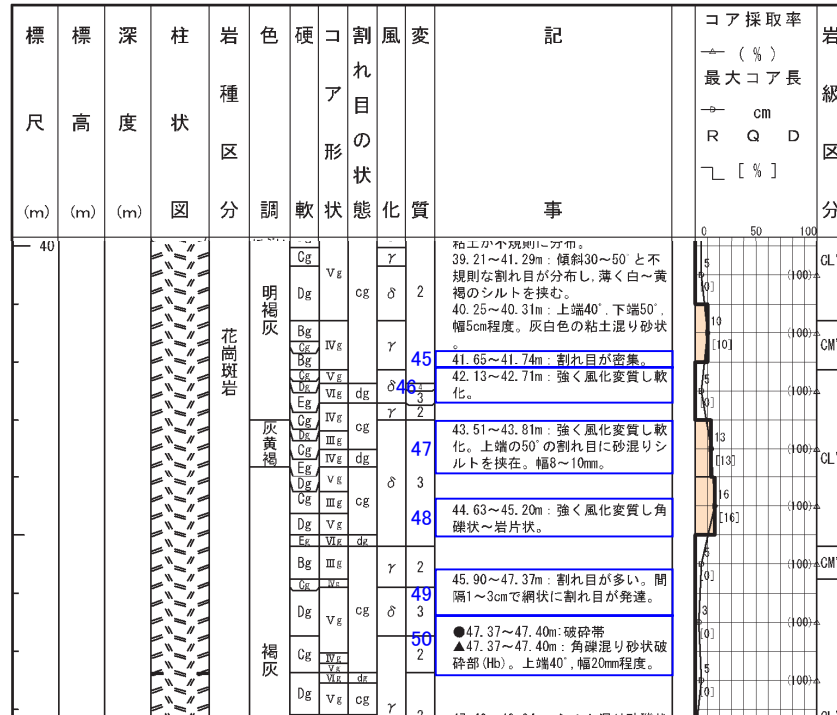


申請書用柱状図

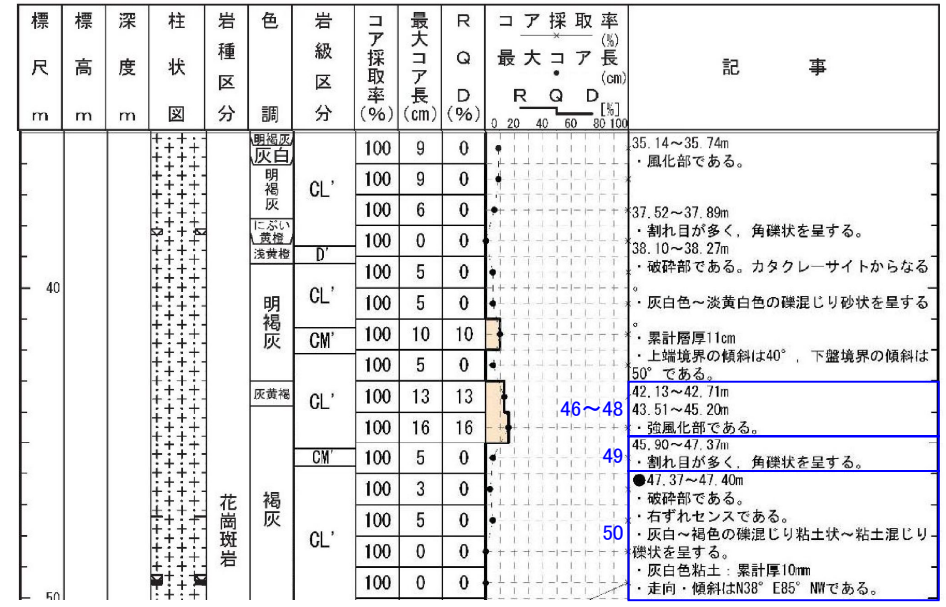


記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
38	<ul style="list-style-type: none"> ・風化と熱水変質の両方を受けた区間について、風化による褐色化が顕著であることを踏まえ、風化部として記載。 ・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
39	<ul style="list-style-type: none"> ・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
40	<ul style="list-style-type: none"> ・“コア形状”の欄に基づき角礫状と記載。
41	<ul style="list-style-type: none"> ・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。
42, 43	<ul style="list-style-type: none"> ・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・一部に粘土やシルトを挟在するが、連続性や直線性に乏しいことから削除。
44	<ul style="list-style-type: none"> ・粘土混じり砂状を呈するが、連続性に乏しいことから削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)



申請書用柱状図

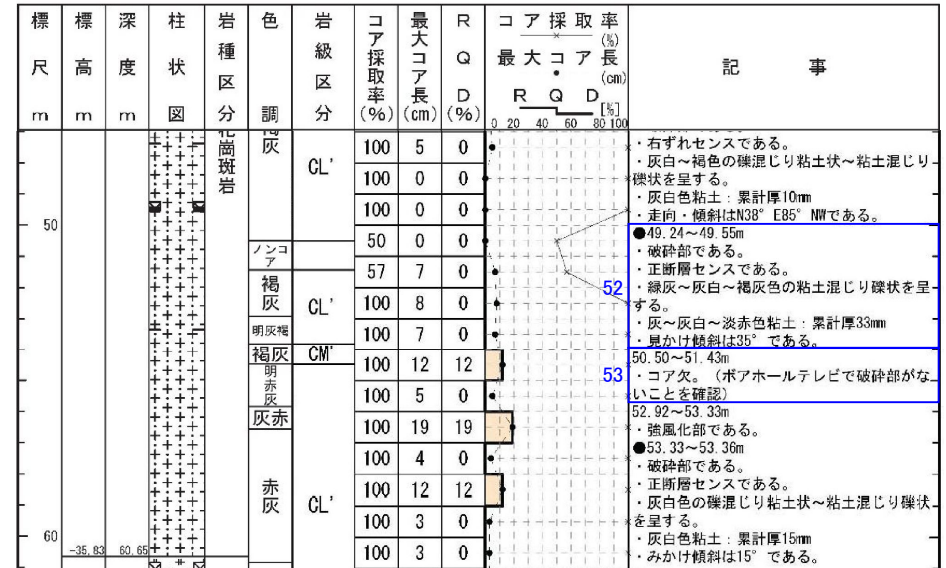


記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
45	・割れ目の発達については、RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。
46~48	・“風化”欄に基づき強風化部と記載。 ・一部に砂混じりシルトを挟むが、周辺の岩盤に同方向の劣化が認められないことから削除。
49	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
50	・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・粒度, 色調, 粘土の累計幅について、申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破砕部の再観察の結果に基づき記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

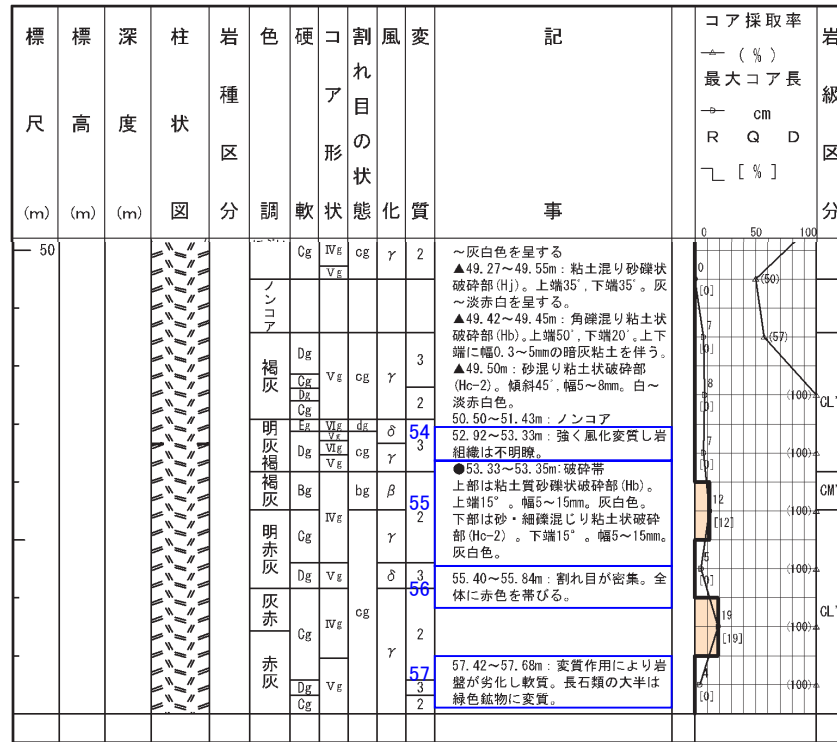


申請書用柱状図

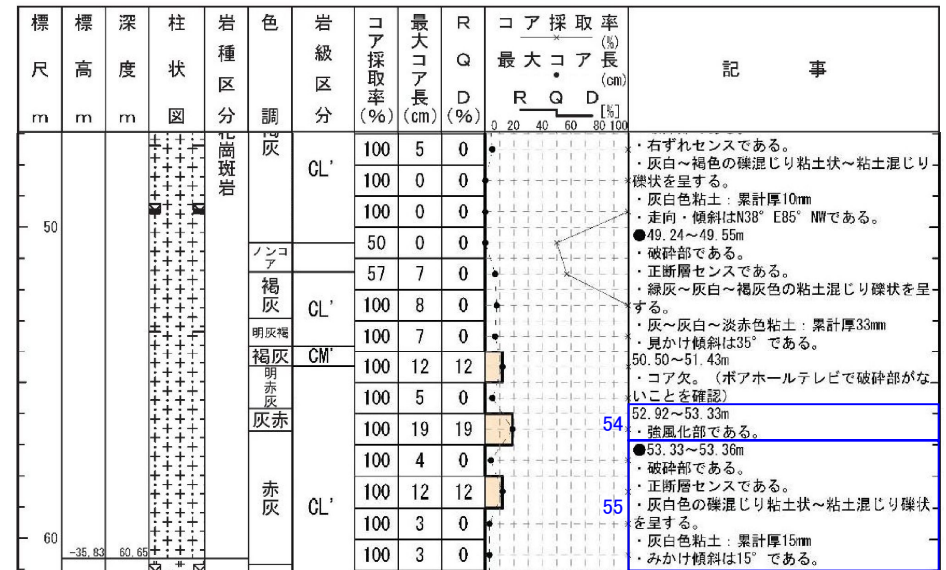


記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
51	・シルト混り砂礫状を呈し、一部で粘土やシルトを含むが、網目状に分布し系統的でなく、連続性や直線性に乏しいことから削除。
52	・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・粒度、色調、粘土の累計幅、見かけ傾斜について、申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破砕部の再観察の結果に基づき記載。
53	・ボアホールテレビの解析結果を踏まえ、破砕部がないことを確認と記載。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

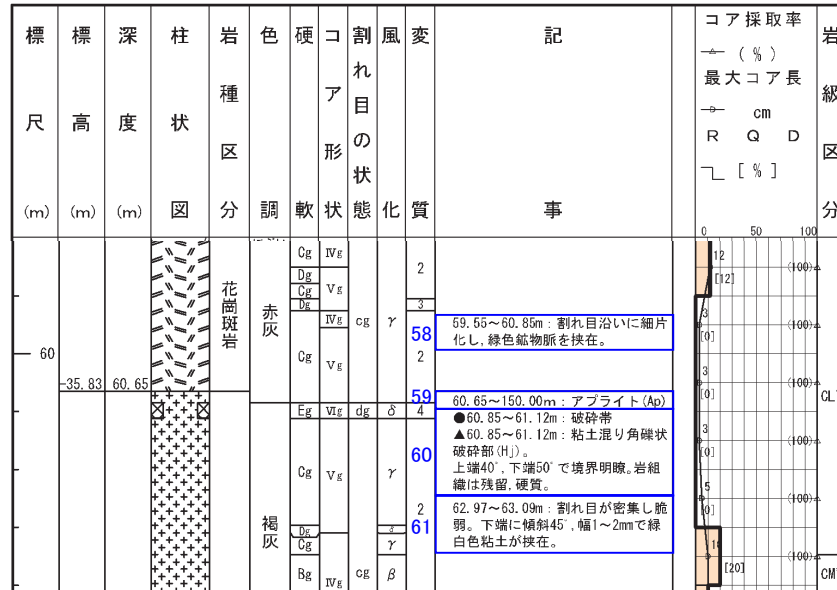


申請書用柱状図

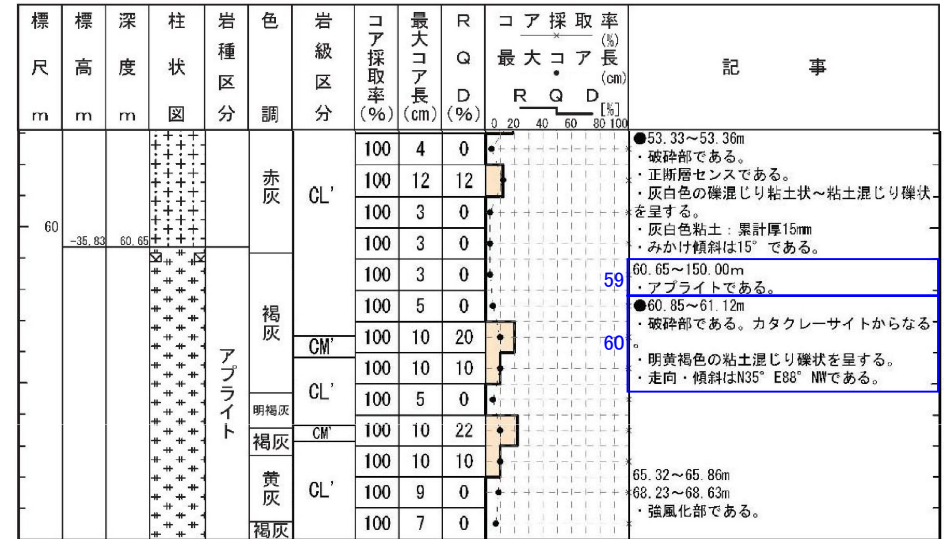


記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
54	・“風化”欄に基づき強風化部と記載。
55	・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・破砕部の深度、粒度、色調、粘土の累計幅、見かけ傾斜について、申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破砕部の再観察の結果に基づき記載。 ・礫状部の幅については、申請書では記載しないこととしているため、幅5～15mmとの記載については削除。
56	・割れ目の発達については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・色調については、補足的なものであるため削除。
57	・軟質化については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・変質鉱物については、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

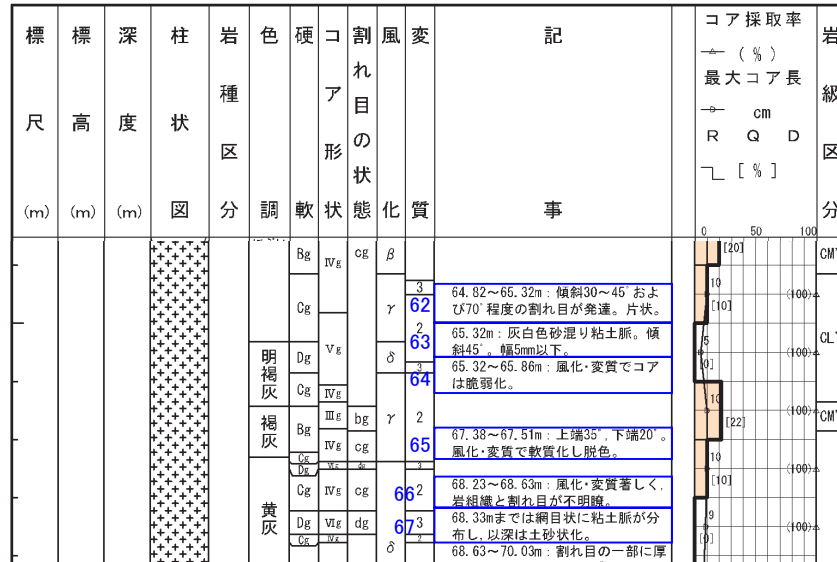


申請書用柱状図

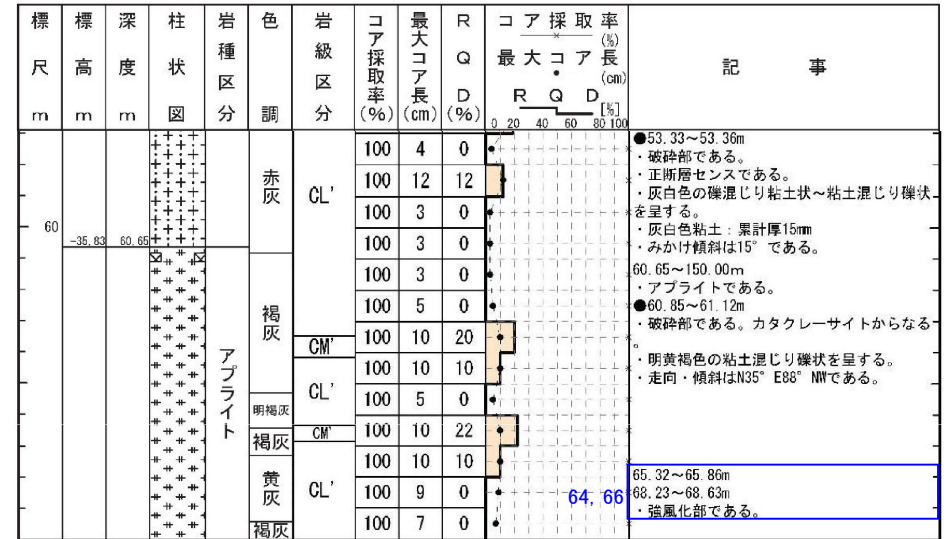


記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
58	<ul style="list-style-type: none"> ・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目沿いの鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
59	<ul style="list-style-type: none"> ・変更なし
60	<ul style="list-style-type: none"> ・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。 ・粒度、色調については、申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破碎部の再観察の結果に基づき記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破碎部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため削除。
61	<ul style="list-style-type: none"> ・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・一部で粘土を挟在するが、粘土の連続性に乏しいことから削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

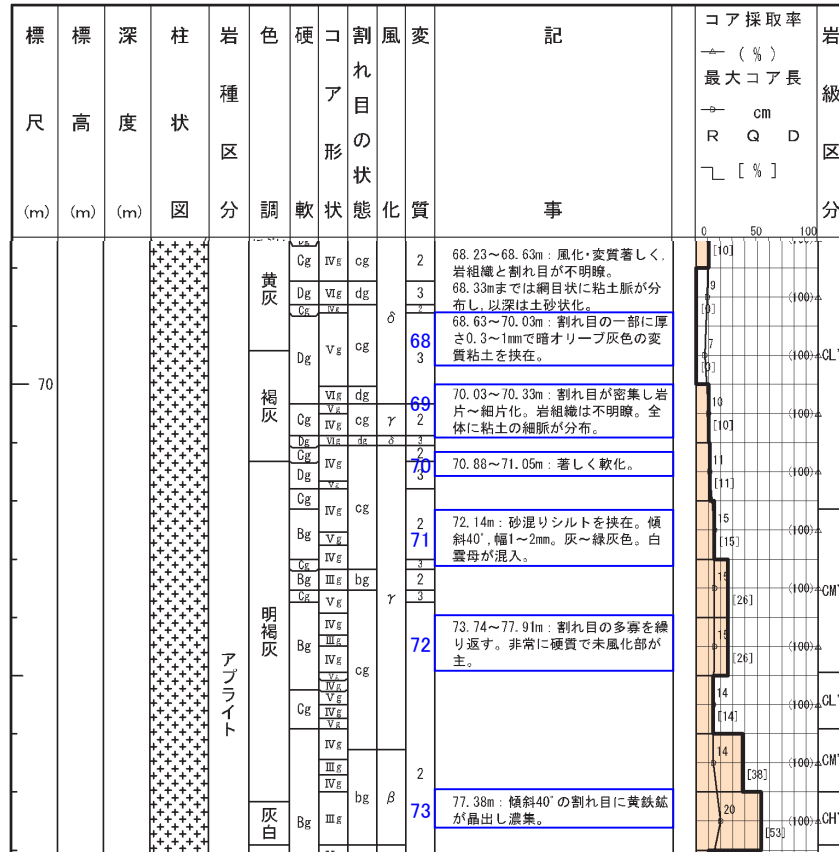


申請書用柱状図

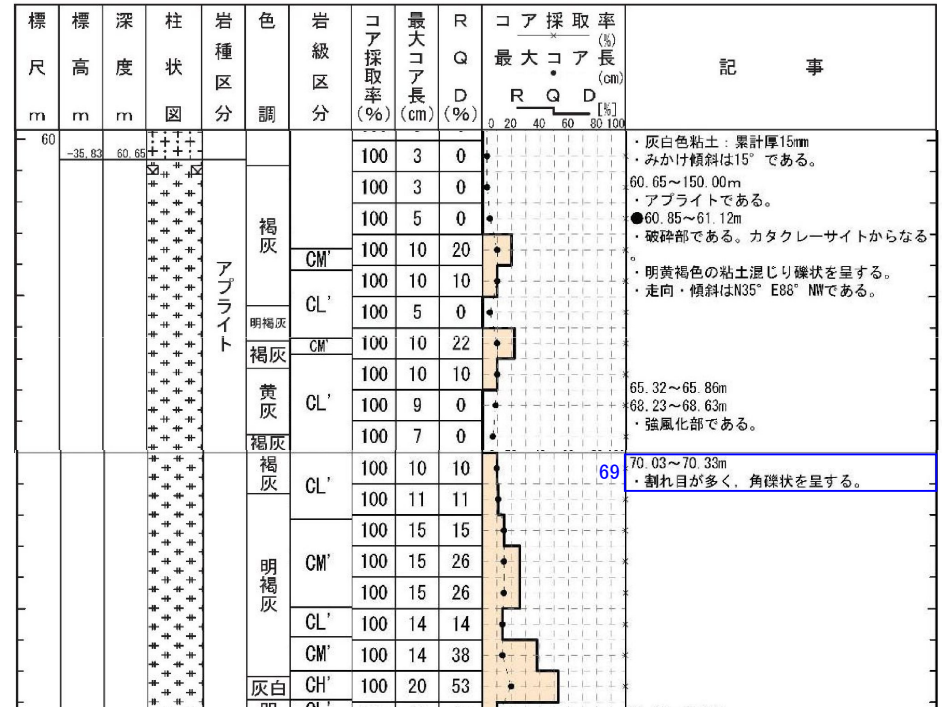


記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
62	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
63	・粘土を挟在するが、連続性に乏しいことから削除。
64	・“風化”欄に基づき強風化部と記載。 ・風化と熱水変質の両方を受けた区間について、風化による褐色化が顕著であることを踏まえ、強風化部として記載。
65	・風化、変質に伴う軟質化については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・脱色については、風化・変質に関する補足的なものであるため削除。
66, 67	・風化と熱水変質の両方を受けた区間について、風化による褐色化が顕著であることを踏まえ、強風化部として記載。 ・網目状に粘土脈が分布しているが、系統的でなく連続性や直線性に乏しいことから削除。 ・土砂状の区間については、周囲との境界が一部不明瞭であり、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

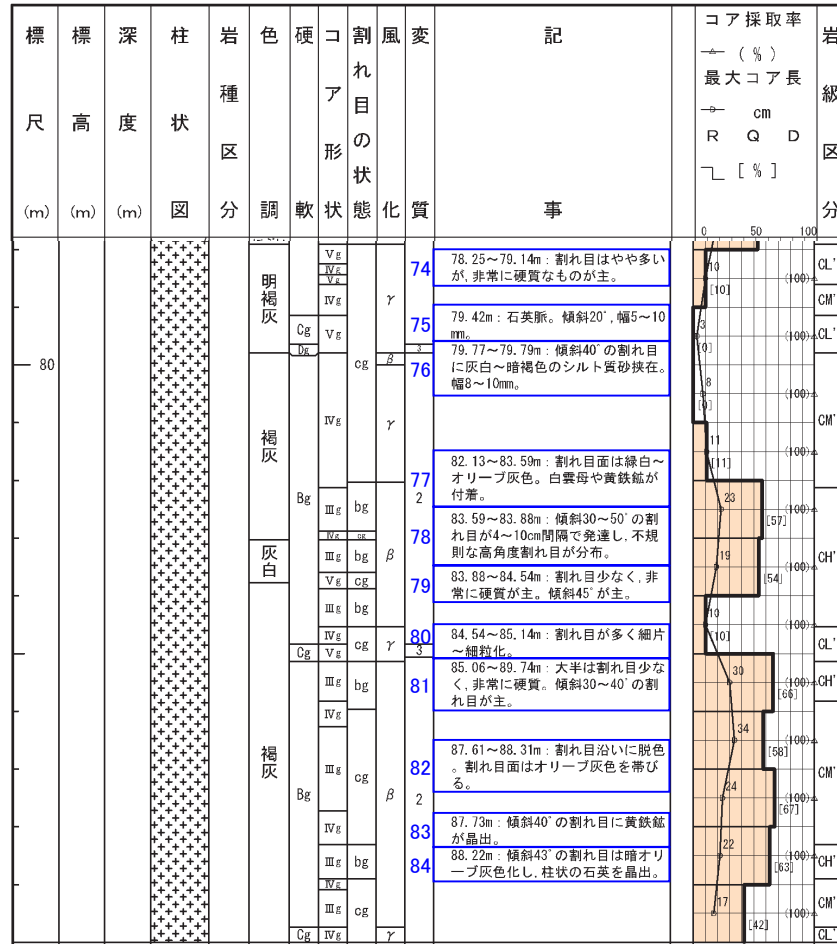


申請書用柱状図

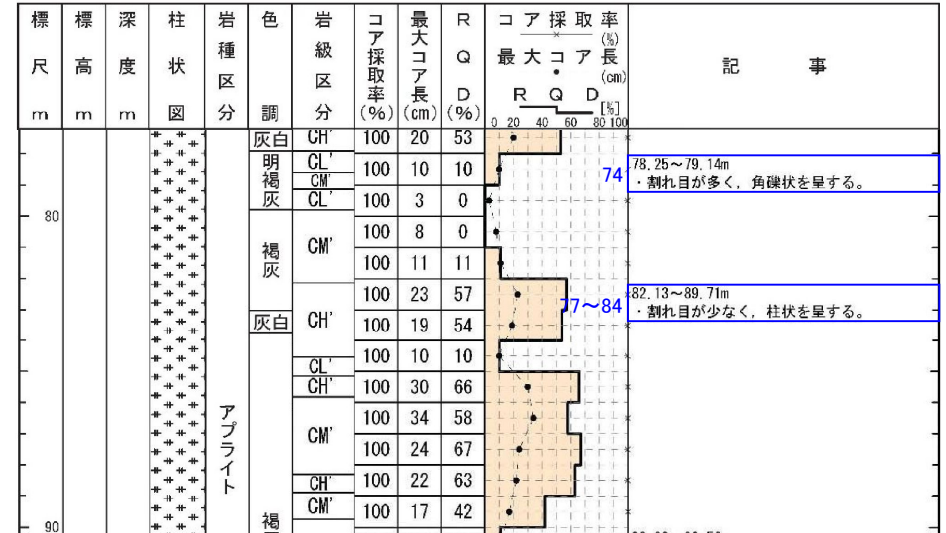


記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
68	・一部に粘土を挟むが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
69	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。 ・原岩組織の残留の程度については、劣化に関する補足的なものであるため削除。 ・一部に粘土を含むが、系統的でなく、直線性や連続性に乏しいことから削除。
70	・軟化については、岩級区分に含めて示しているため削除。
71	・砂混りシルトを挟むが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 ・鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
72	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。
73	・割れ目沿いの鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

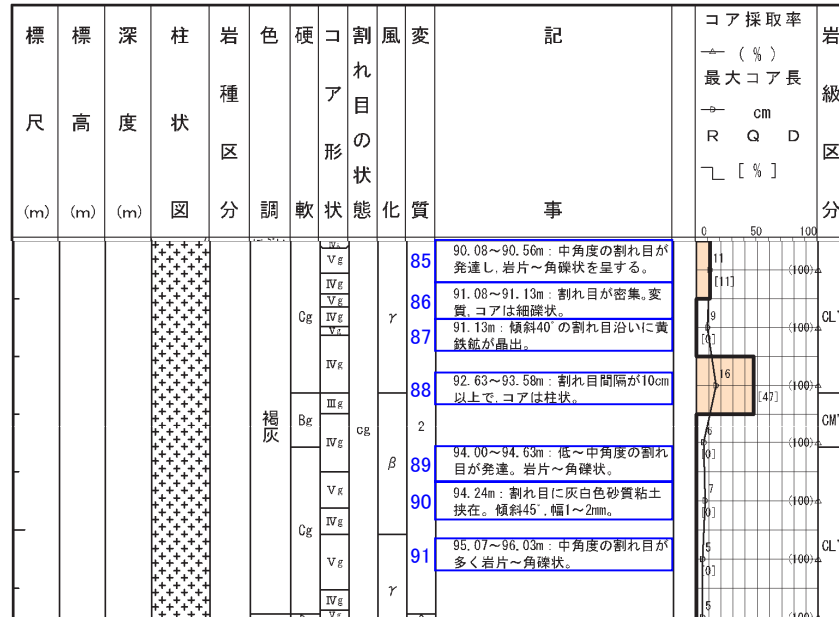


申請書用柱状図

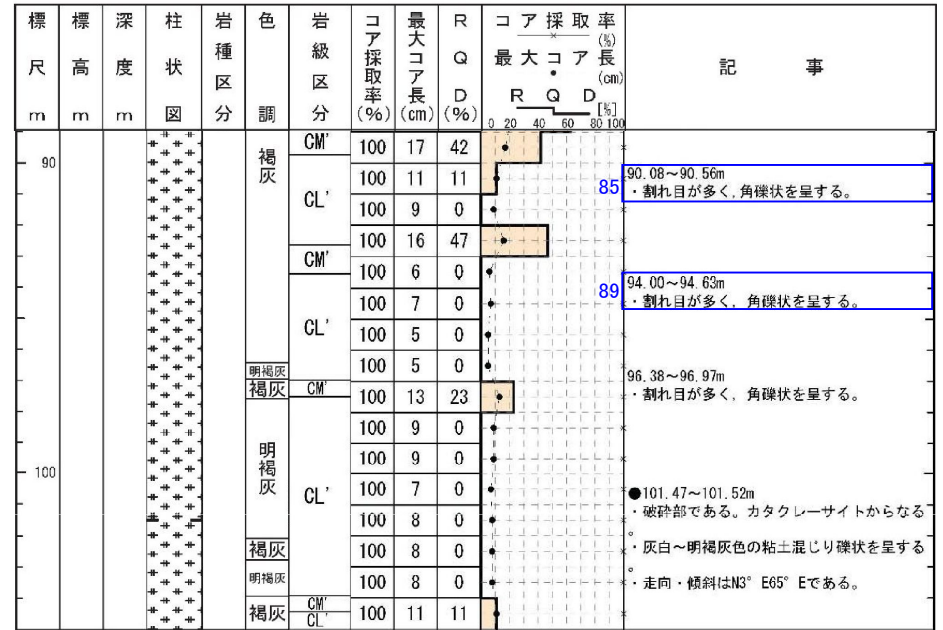


記事	報告書作成用柱状図 (H26年9月) ⇒ 申請書用柱状図
74	<ul style="list-style-type: none"> “コア形状”の欄に基づき角礫状と記載。 硬軟については岩級区分に含めて示しているため削除。
75	<ul style="list-style-type: none"> 鉱物脈については、補足的なものであるため削除。
76	<ul style="list-style-type: none"> シルト質砂を挟在するが、周辺の岩盤に劣化が認められないことから削除。
77~84	<ul style="list-style-type: none"> 下端深度89.74m⇒89.71m※1 硬軟や割れ目が4~10cm間隔で発達との記載については、割れ目の発達程度を、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 割れ目の変色、鉱物晶出、傾斜については、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

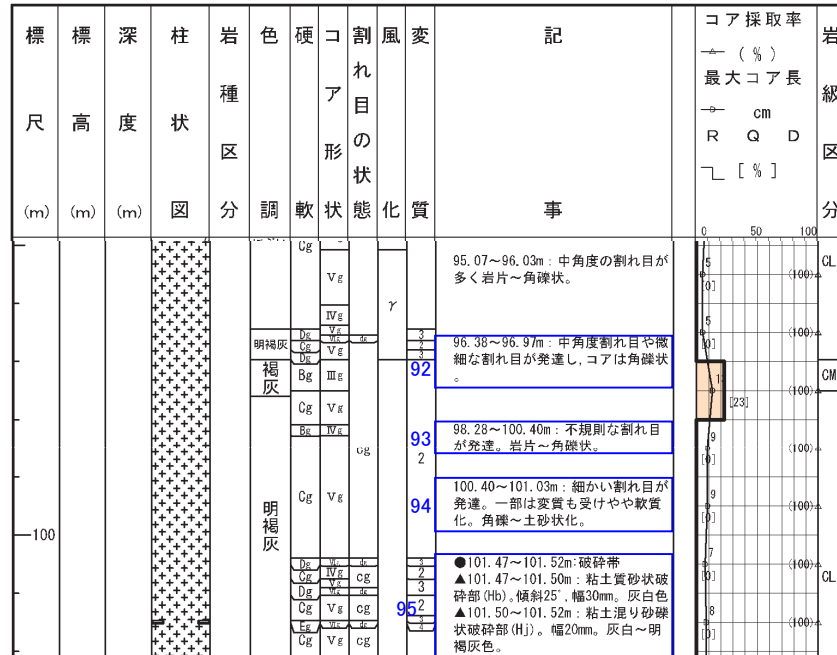


申請書用柱状図

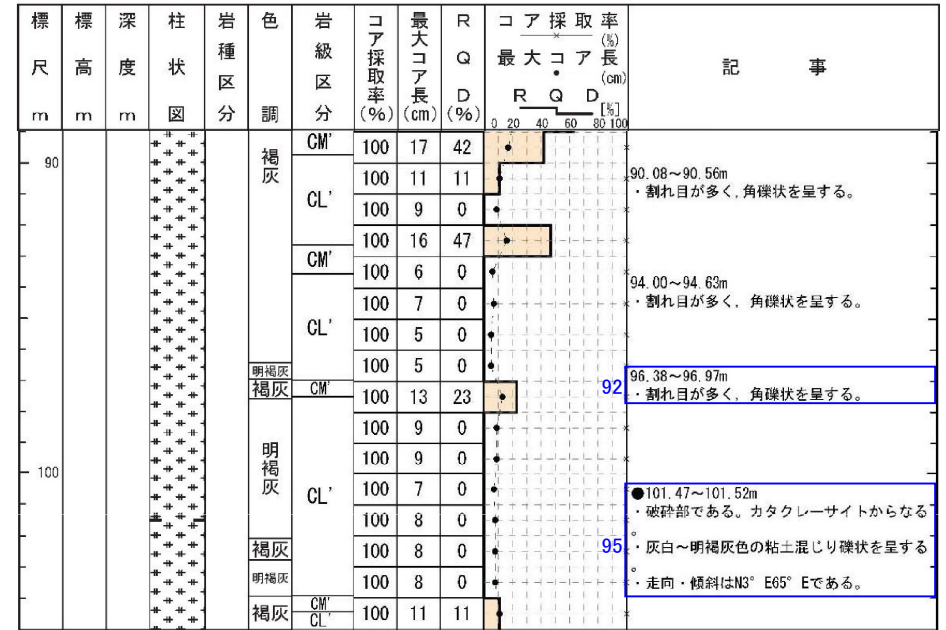


記事	報告書作成用柱状図 (H26年9月) ⇒ 申請書用柱状図
85	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
86, 87	・割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目沿いの鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
88	・割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
89	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
90	・砂質粘土を挟在するが、連続性や直線性に乏しいことから削除。
91	・割れ目の発達の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。

報告書作成用柱状図 (H26年9月)



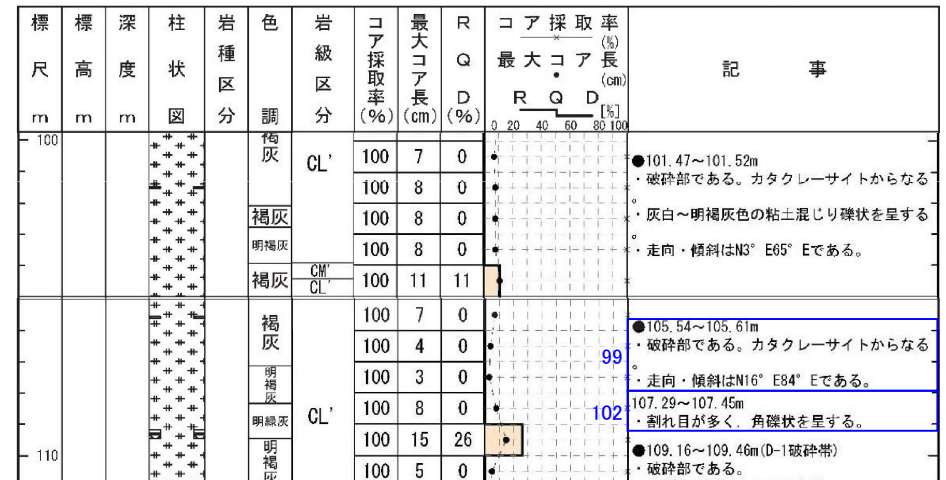
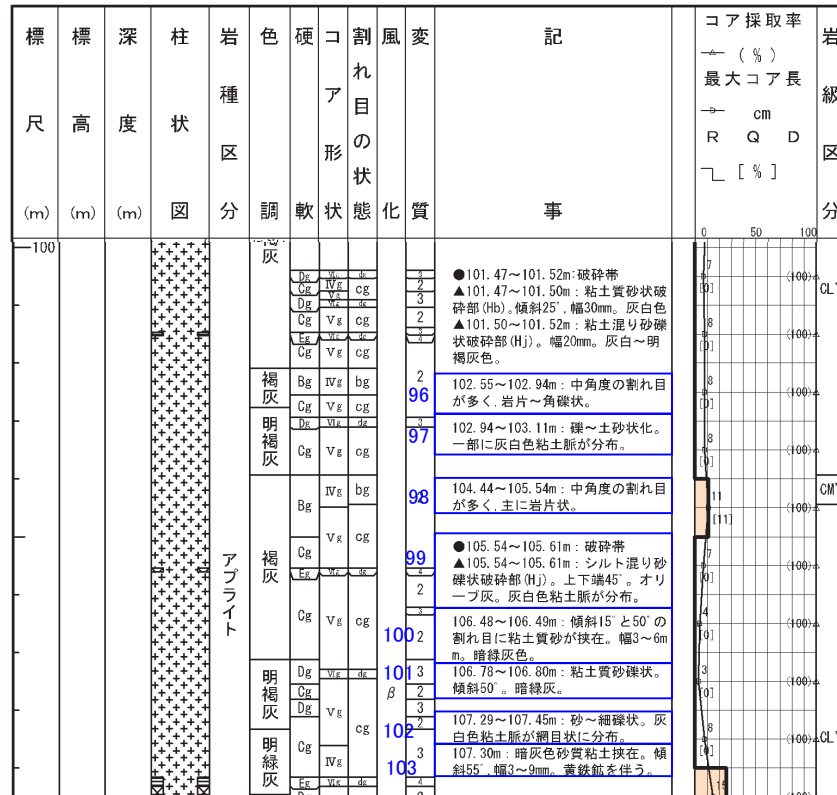
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
92	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
93	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
94	・割れ目の発達、変質程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
95	<ul style="list-style-type: none"> ・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。 ・粒度として「粘土質砂状」の記載漏れ。※1 ・粒度、色調については、申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破砕部の再観察の結果に基づき記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため削除。

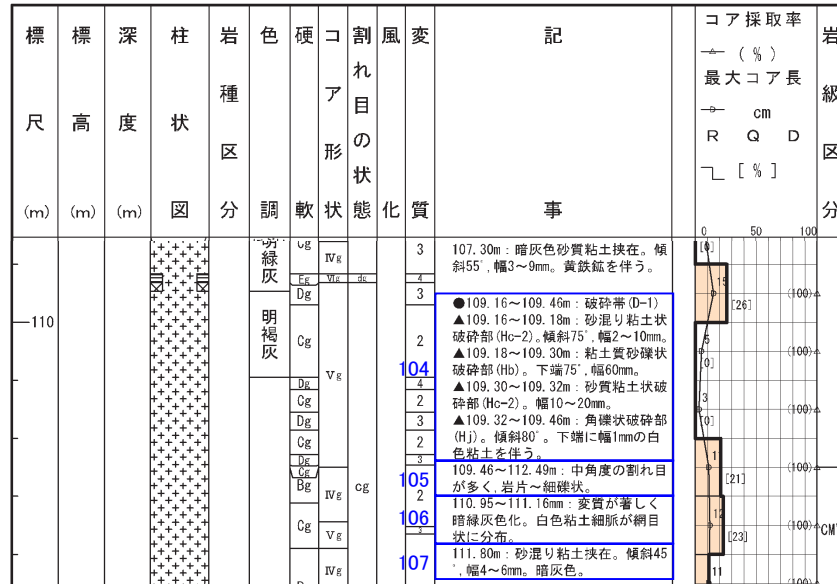
報告書作成用柱状図
(H26年9月)

申請書用柱状図

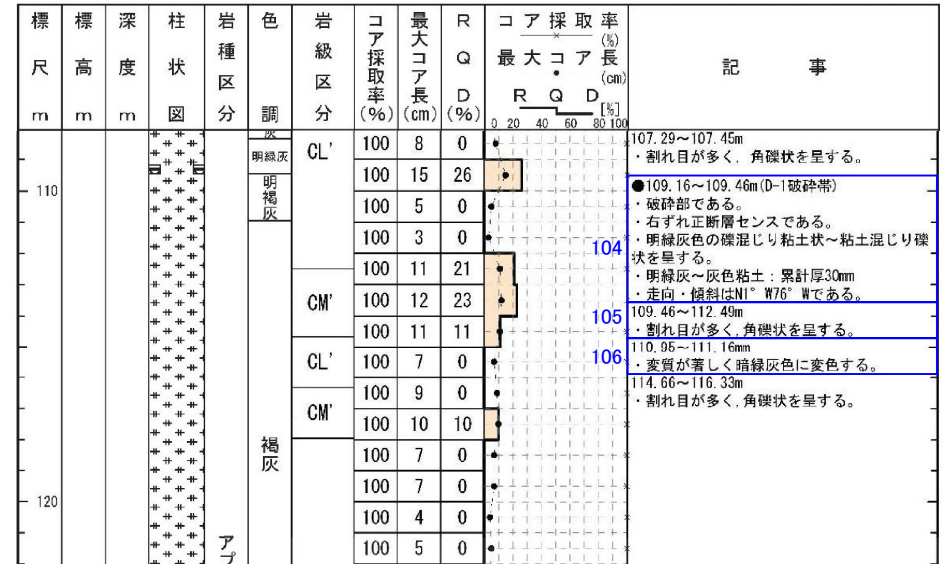


記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
96	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
97	・礫～土砂状を呈し一部に粘土を含むが、系統的でなく、連続性や直線性に乏しいことから削除。
98	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
99	・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなること記載。 ・オリブ灰色のシルト混り砂礫状を呈するの記載漏れ。 ^{※1} ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破碎部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため削除。
100	・粘土質砂を挟在するが、連続性や直線性に乏しいことから削除。
101	・粘土質砂礫状を呈するが、連続性や直線性に乏しく、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
102	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。 ・一部に粘土を挟在するが、系統的でなく、連続性や直線性に乏しいことから削除。
103	・粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

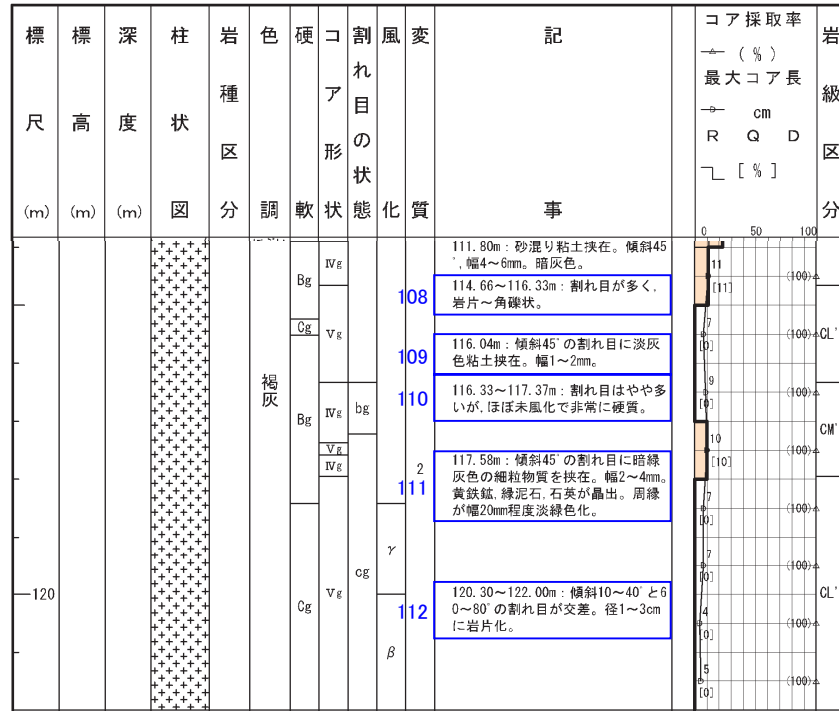


申請書用柱状図

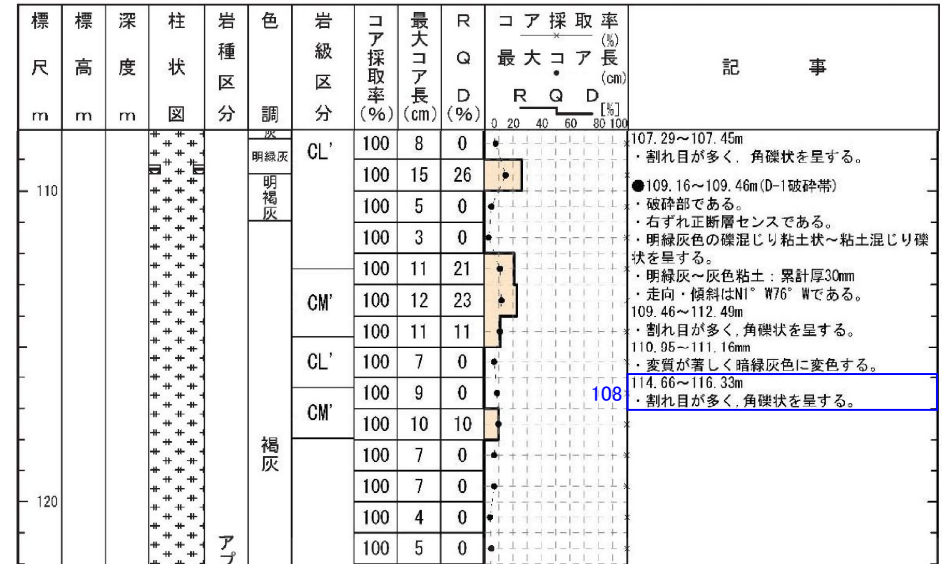


記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
104	<ul style="list-style-type: none"> 薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 破砕部の深度、粒度、色調、粘土の累計幅について、申請前までに別途行っていた、地盤安定解析用の物性値設定を目的とした破砕部の再観察の結果に基づき記載。 ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため削除。
105	<ul style="list-style-type: none"> “コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
106	<ul style="list-style-type: none"> “コア形状”欄に基づき角礫状と記載。 一部に粘土を含むが、系統的でなく、連続性や直線性に乏しいことから削除。 110.95~111.16mmは110.95~111.16mの誤り。※2
107	<ul style="list-style-type: none"> 砂混り粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)



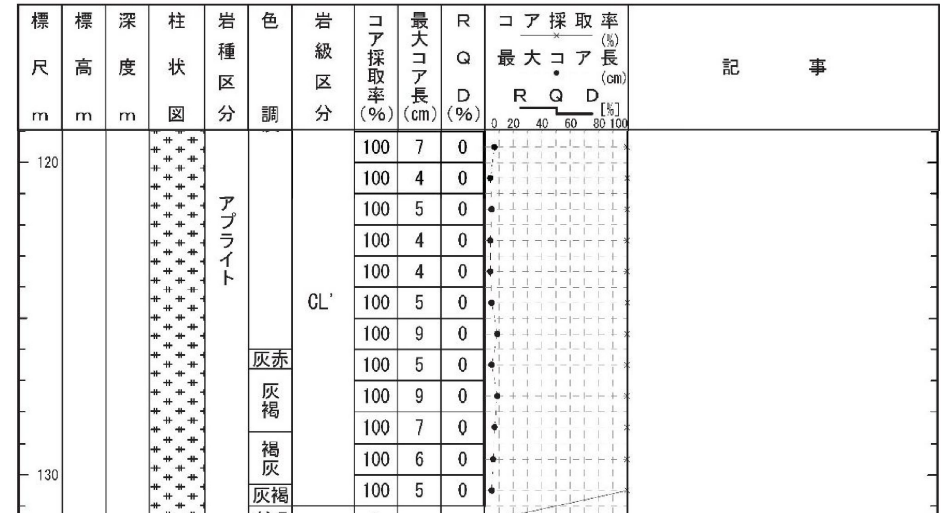
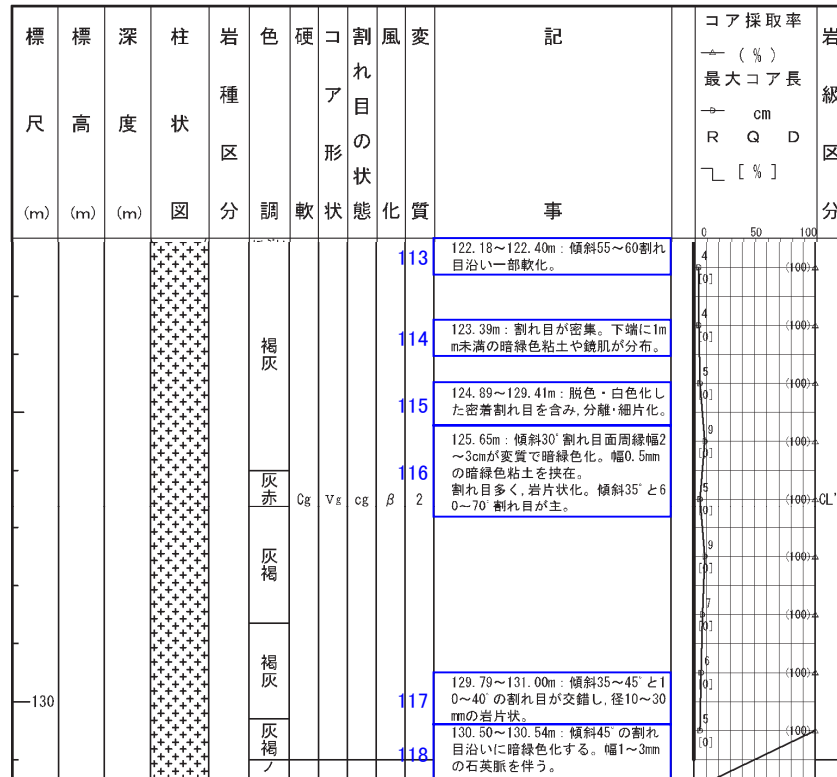
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
108	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
109	・粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
110	・硬軟や割れ目の発達については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
111	・細粒物質を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。 ・割れ目沿いの鉱物晶出、変色については、補足的なものであるため削除。
112	・割れ目の発達については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

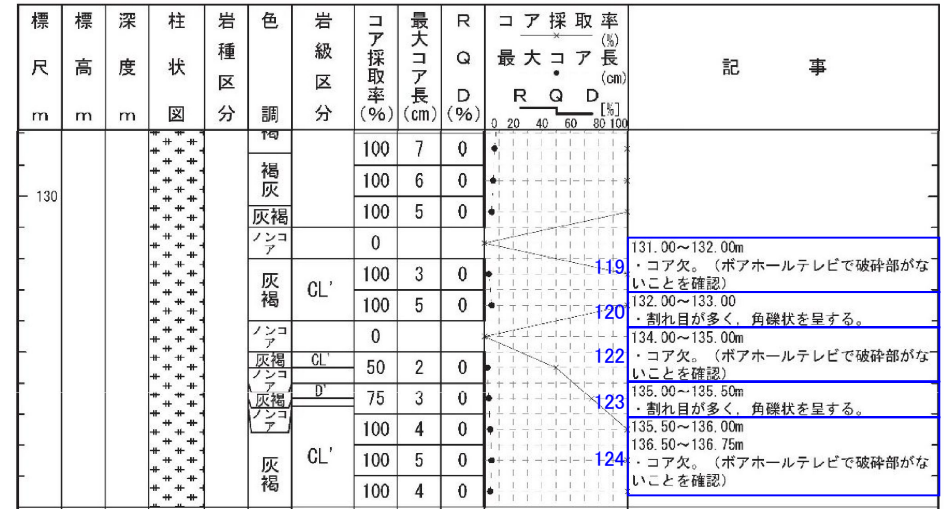
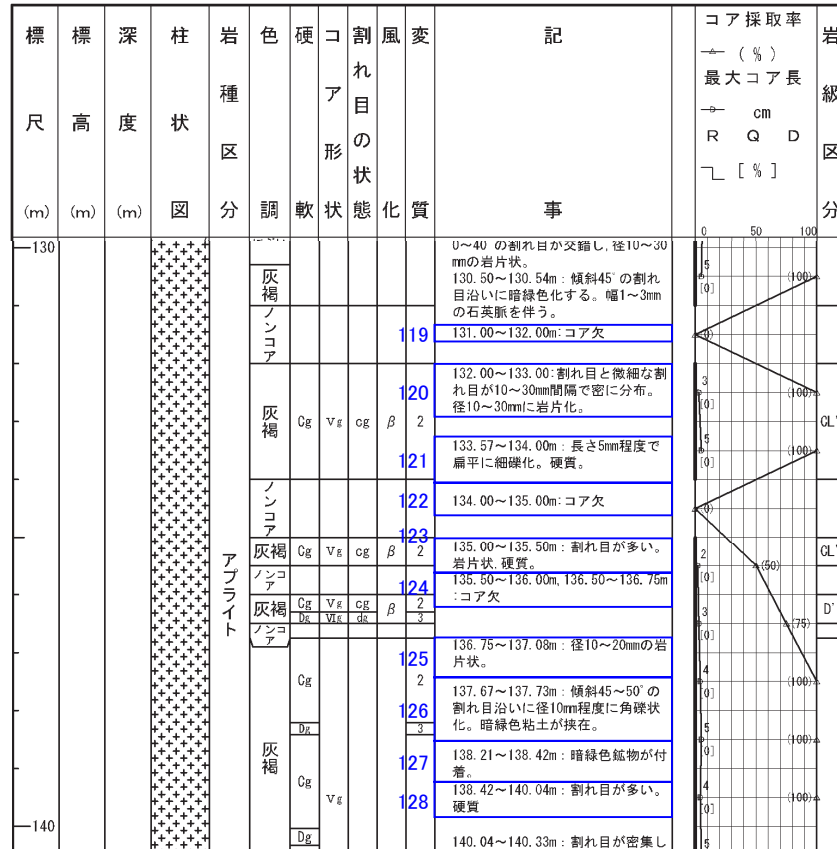
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
113	・割れ目沿いに軟質化しているが、連続性や直線性に乏しいことから削除。
114	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・一部で粘土や鏡肌を伴うが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
115	・変色については、補足的なものであるため削除。 ・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
116	・割れ目の発達、変質の程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目沿いの変色については、補足的なものであるため削除。 ・割れ目が発達し粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
117	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
118	・割れ目沿いの変色や鉱物脈については、補足的なものであるため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

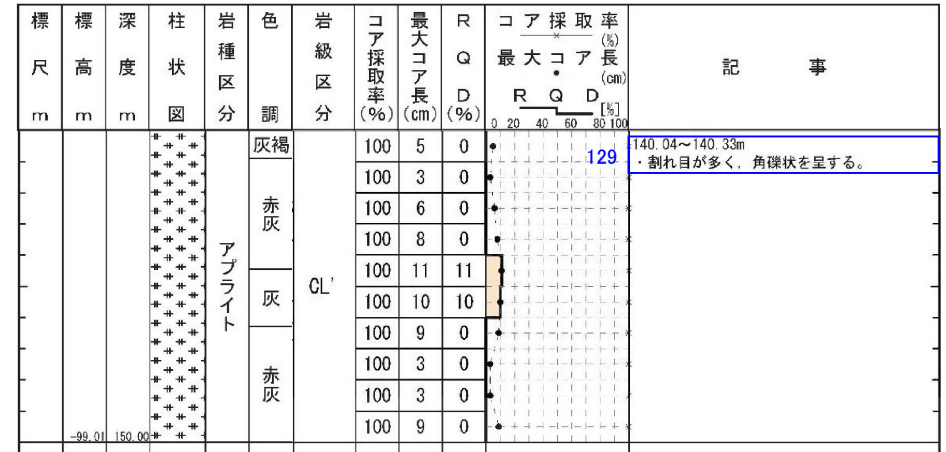
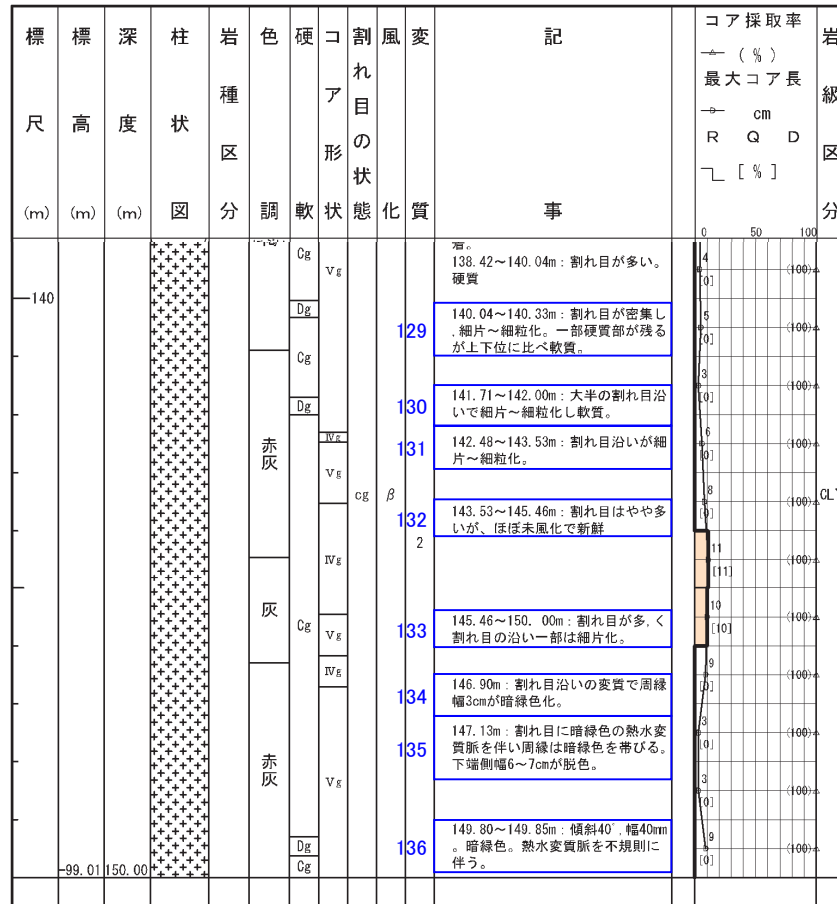
申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
119	・ポアホールテレビの解析結果を踏まえ、破砕部がないことを確認と記載。
120	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。 ・132.00~133.00は132.00~133.00mの誤り。※2
121	・細礫化しているが、掘削時の機械割れと判断し削除。
122	・ポアホールテレビの解析結果を踏まえ、破砕部がないことを確認と記載。
123	・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
124	・ポアホールテレビの解析結果を踏まえ、破砕部がないことを確認と記載。
125	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。
126	・割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。 ・割れ目沿いに角礫状粘土を挟在するが、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
127	・鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
128	・硬軟や割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分で示しているため削除。

報告書作成用柱状図
(H26年9月)

申請書用柱状図



記事	報告書作成用柱状図(H26年9月)⇒申請書用柱状図
129	・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・“コア形状”欄に基づき角礫状と記載。
130	・割れ目沿いで細片~細粒化しているが、掘削時の機械割れと判断し削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。
131	・割れ目沿いで細片~細粒化しているが、掘削時の機械割れと判断し削除。
132	・割れ目の発達程度については、RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。
133	・割れ目の発達程度については、RQD, 最大コア長, 岩級区分で示しているため削除。
134	・割れ目沿いの変色については、補足的なものであるため削除。
135	・熱水変質脈を伴うが、変色部やその周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
136	・熱水変質脈を伴うが、変色部の周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。

H27-B-1

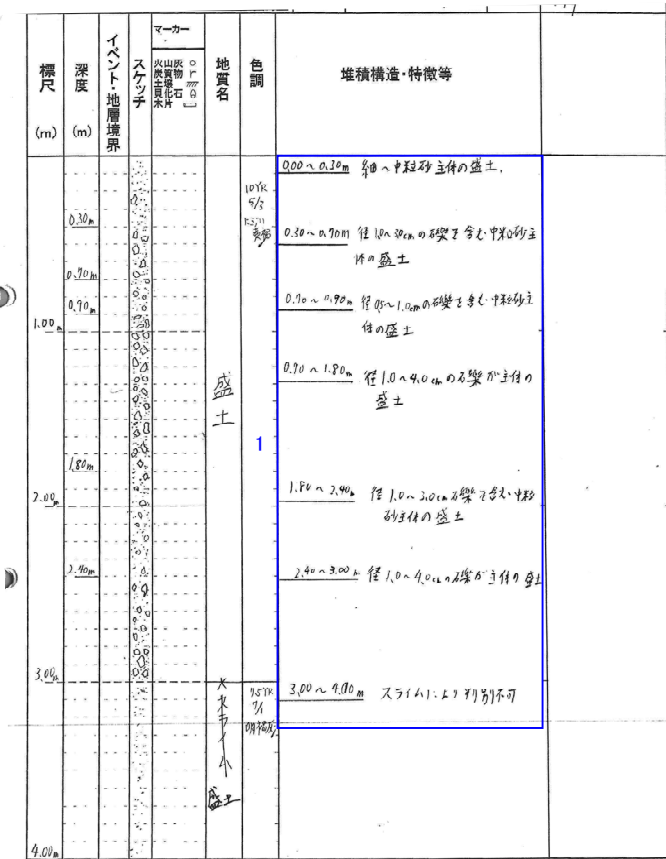
余白

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図



スケッチ: 礫はクサリ ● 半クサリ ○ 硬質 ○ 礫種は黒雲母花崗岩Gr, 花崗斑岩Gp, アブライトAp 等
境界 明瞭 --- 不明瞭 - - - - 亀裂は赤線、角度、赤線等

記事内容
0.00~0.30m 細~中粒砂主体の盛土
0.30~0.70m 径1.0~3.0cmの礫を含む中粒砂主体の盛土
0.70~0.90m 径0.5~1.0cmの礫を含む中粒砂主体の盛土
0.90~1.80m 径1.0~4.0cmの礫が主体の盛土
1.80~2.40m 径1.0~3.0cmの礫を含む中粒砂主体の盛土
2.40~3.00m 径1.0~4.0cmの礫が主体の盛土
3.00~4.00m スライムにより判別不可

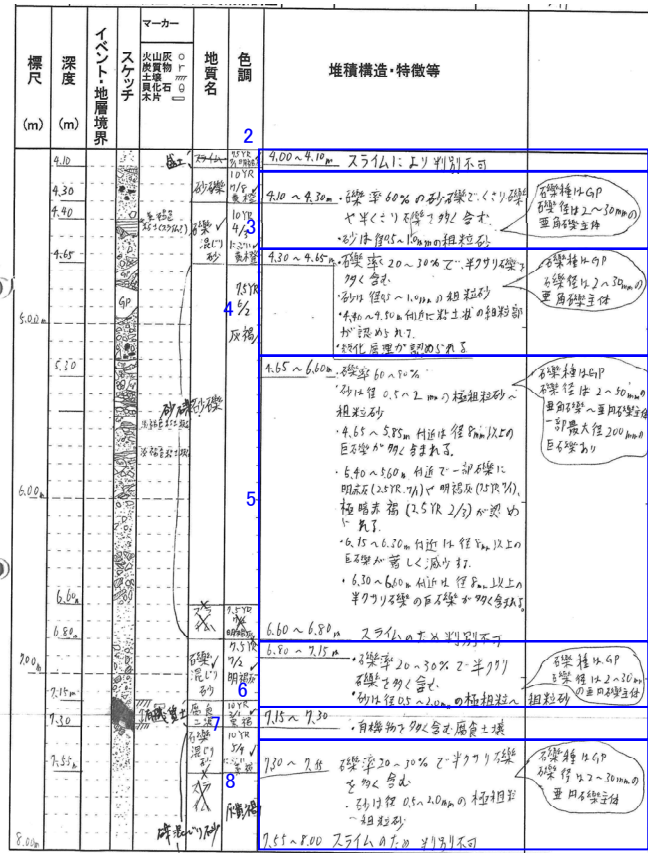
標尺	標高	深度	柱状	岩種	色調	岩級	コア採取率	最大コア長	R	Q	D	採取率	最大コア長	記事
m	m	m	図	分	調	分	(%)	(cm)	(%)	(%)	(%)	(%)	(cm)	
17.33	4.10			盛土	に ぶ い 黄 橙		100					1, 2	0.00~4.10m 盛土である。	

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
1, 2	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。

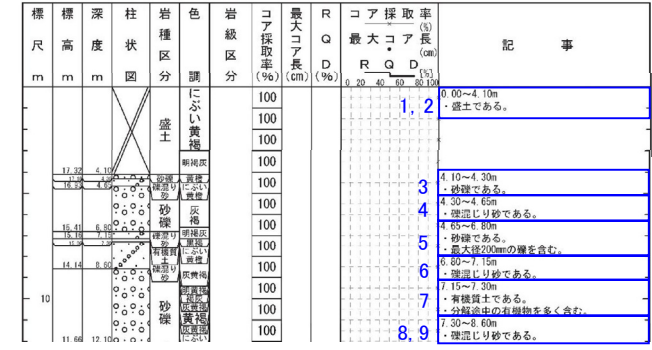
コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図



記事内容
2 4.00~4.10m スライムにより判別不可
3 4.10~4.30m ・礫率60%の砂礫でくさり礫や半くさり礫を多く含む ・砂は径0.5~1.0mmの粗粒砂 礫種はGP 礫径は2~30mmの垂円礫主体
4 4.30~4.65m ・礫率20~30%で半くさり礫を多く含む ・砂は径0.5~1.0mmの粗粒砂 ・4.40~4.50m付近に粘土状の細粒部が認められる ・絨化層理が認められる 礫種はGP 礫径は2~30mmの垂円礫主体
5 4.65~6.60m ・礫率60~80% ・砂は径0.5~2mmの極粗粒砂~粗粒砂 ・4.65~5.85m付近は径8mm以上の巨礫が多く含まれる ・5.40~5.60m付近で一部礫に明赤灰(2.5YR7/1)や明褐灰(7.5YR7/1)、暗赤褐(2.5YR2/3)が認められる ・6.15~6.30m付近は径8mm以上の巨礫が著しく減少する ・6.30~6.60m付近は径8mm以上の半くさり礫の巨礫が多く含まれる 礫種はGP 礫径は2~50mmの垂円礫から垂円礫主体一部最大径200mmの巨礫あり 6.80~6.80m スライムのため判別不可
6 6.80~7.15m ・礫率20~30%で半くさり礫を多く含む ・砂は径0.5~2.0mmの極粗粒~粗粒砂 礫種はGP 礫径は2~30mmの垂円礫主体
7 7.15~7.30 ・有機物を多く含む腐植土壌
7 7.30~7.55 ・礫率20~30%で半くさり礫を多く含む ・砂は径0.5~2.0mmの極粗粒~粗粒砂 礫種はGP 礫径は2~30mmの垂円礫主体
8 7.55~8.00 スライムのため判別不可

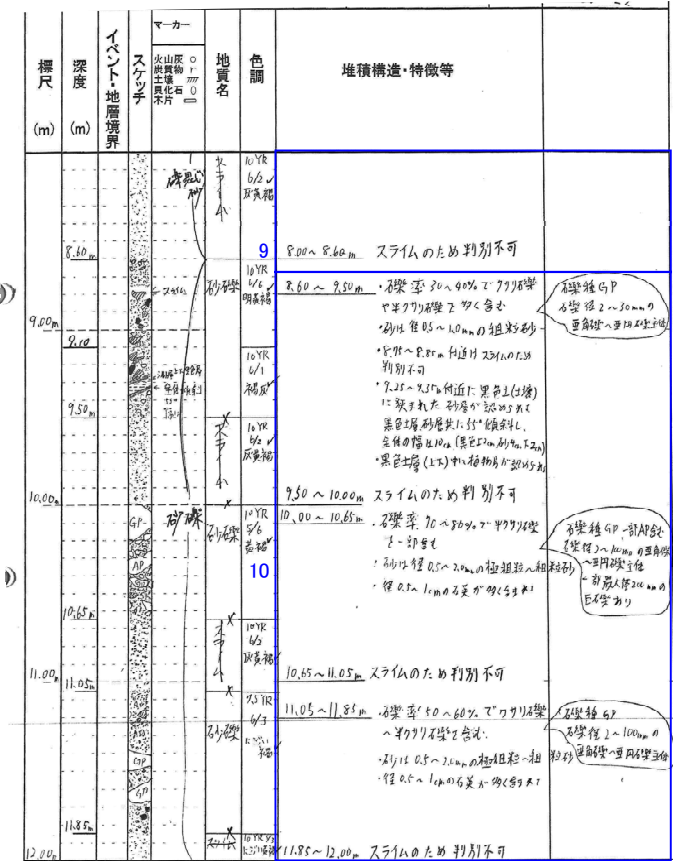


記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
1, 2	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
3	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
4	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
5	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。 ・周囲に比べ含まれる礫が大きく、目立つことから、礫の特徴として、最大礫径を記載。
6	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
7	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。 ・周囲との違いが見かけ上顕著ではないため、周囲と区別できる特徴として、分解途中の有機物を多く含むことを記載。 ・表現の見直し(有機物を多く含む腐植土壌→分解途中の有機物を多く含む)
8, 9	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図



記事内容	
9	<p>8.00~8.60m スライムのため判別不可</p> <p>8.60~9.50m</p> <ul style="list-style-type: none"> ・礫率30~40%でクサリ礫や半クサリ礫を多く含む ・砂は径0.5~1.0mmの粗粒砂 ・8.75~8.85m付近はスライムのため判別不可 ・9.25~9.35m付近に黒色土(土壌)に挟まれた砂層が認められる黒色土層砂層共に5°傾斜し全体の幅は10cm(黒色土2cm砂4cm下2cm) ・黒色土層(上下)中に植物片が認められる <p>礫種GP</p> <p>礫径2~30mmの垂角礫~垂円礫主体</p> <p>9.50~10.00m スライムのため判別不可</p> <p>10.00~10.65m</p> <ul style="list-style-type: none"> ・礫率70~80%で半クサリ礫を一部含む ・砂は径0.5~2.0mmの極粗粒~粗粒砂 ・径0.5~1cmの石英が多く含まれる <p>礫種GP一部AP含む</p> <p>礫径2~100mmの垂角礫~垂円礫主体一部最大径200mmの巨礫あり</p> <p>10.65~11.05m スライムのため判別不可</p> <p>11.05~11.85m</p> <ul style="list-style-type: none"> ・礫率50~60%でクサリ礫~半クサリ礫を含む ・砂は0.5~2.0mmの極粗粒~粗粒砂 ・径0.5~1cmの石英が多く含まれる <p>礫種GP</p> <p>礫径2~100mmの垂角礫~垂円礫主体</p> <p>11.85~12.00m スライムのため判別不可</p>
10	<p>10.00~10.65m</p> <ul style="list-style-type: none"> ・礫率70~80%で半クサリ礫を一部含む ・砂は径0.5~2.0mmの極粗粒~粗粒砂 ・径0.5~1cmの石英が多く含まれる <p>礫種GP一部AP含む</p> <p>礫径2~100mmの垂角礫~垂円礫主体一部最大径200mmの巨礫あり</p>

標尺	標高	深度	柱状図	岩種区分	色調	岩級区分	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	R	Q	D	記事
10	14.15	8.00					100					・最大径200mmの礫を含む。 6.80~7.15m ・確認しり砂である。 7.15~7.30m ・有機質土である。 ・分級途中の有機物を多く含む。 7.30~8.60m ・確認しり砂である。 8.60~12.10m ・砂層である。 ・一部有機質土の薄層を挟む。 12.10~12.43m ・砂である。 ・少量のくさり礫を含む。
		8.60					100					
		9.00					100					
		9.50					100					
		10.00					100					
		10.65					100					
		11.05					100					
		11.85					100					
		12.00					100					

スケッチ: 礫はクサリ ● 半クサリ ○ 硬質 ○ 礫種は黒雲母花崗岩Gr, 花崗斑岩Gp, アブライトAp 等
境界 明瞭 — 不明瞭 - - - 亀裂は赤線, 角度, 糸線等

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
9	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
10, 11	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。 ・区間内で特異な色調を示し、目立つことから、有機質土の薄層について記載。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	イベント・地層境界 スケッチ	地質名 ○ 707 ○ 708 ○ 709 ○ 710 ○ 711 ○ 712 ○ 713 ○ 714 ○ 715 ○ 716 ○ 717 ○ 718 ○ 719 ○ 720 ○ 721 ○ 722 ○ 723 ○ 724 ○ 725 ○ 726 ○ 727 ○ 728 ○ 729 ○ 730 ○ 731 ○ 732 ○ 733 ○ 734 ○ 735 ○ 736 ○ 737 ○ 738 ○ 739 ○ 740 ○ 741 ○ 742 ○ 743 ○ 744 ○ 745 ○ 746 ○ 747 ○ 748 ○ 749 ○ 750 ○ 751 ○ 752 ○ 753 ○ 754 ○ 755 ○ 756 ○ 757 ○ 758 ○ 759 ○ 760 ○ 761 ○ 762 ○ 763 ○ 764 ○ 765 ○ 766 ○ 767 ○ 768 ○ 769 ○ 770 ○ 771 ○ 772 ○ 773 ○ 774 ○ 775 ○ 776 ○ 777 ○ 778 ○ 779 ○ 780 ○ 781 ○ 782 ○ 783 ○ 784 ○ 785 ○ 786 ○ 787 ○ 788 ○ 789 ○ 790 ○ 791 ○ 792 ○ 793 ○ 794 ○ 795 ○ 796 ○ 797 ○ 798 ○ 799 ○ 800	色調	堆積構造・特徴等
	12.00		11		12.00~12.10m スライムのため判別不可
	12.49		12		12.10~12.50m 礫率5%未満のクサリ礫を 含む。 砂は0.5~1.0mmの粗粒砂 礫種GP 礫径2~30mmの亜円礫主体 (着岩)
	13.00				
	14.00				
	15.00				
	16.00				

スケッチ: 礫はクサリ ● 半クサリ ○ 硬質 ○ 礫種は黒雲母花崗岩Gr, 花崗斑岩Gp, アブライトAp 等
境界 明瞭 — 不明瞭 - - - 亀裂は赤線, 角度, 糸線等

記事内容
11 12.00~12.10m スライムのため判別不可
12 12.10~12.50m 礫率5%未満でクサリ礫を含む 砂は0.5~1.0mmの粗粒砂 礫種GP 礫径2~30mmの亜円礫主体 (着岩)

標尺 m	標高 m	深度 m	柱状 図	岩種 区分	色調	岩級 区分	コア採取 率 (%)	最大コア 長 (cm)	R Q D (%)	コア採取 率 (%)	最大コア 長 (cm)	記事
10							100					
		11.66					100					
		12.00					100					
		12.49					100	1	0		10, 11	
		12.50					100	1	0		12	
		12.99					100	11	11			
		13.48					100	2	0			
		13.97					100	8	0			
		14.46					100	10	10			
		14.95					100	4	0			
20		15.44					100	14	14			

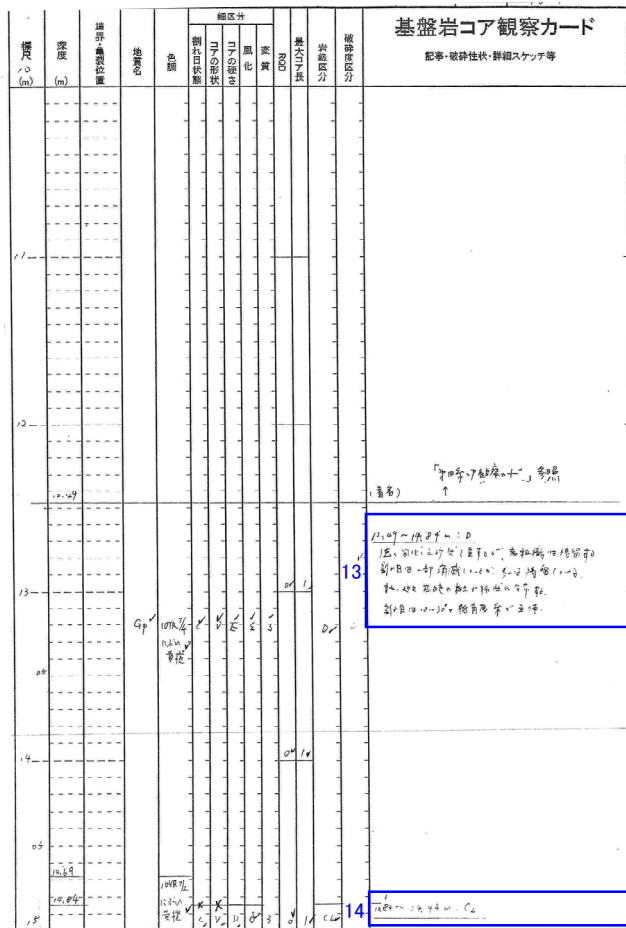
記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
10, 11	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。
12	・堆積物の記載は、盛土、砂礫等の性状を示すこととし、“地質名”欄に対応した層相名を記載。 ・下端深度12.50m→12.49m ^{※3} ・少量含まれる礫が比較的大きく、目立つため、くさり礫について記載。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図



記事内容	
(着岩)	
13	12.49~14.84m: D 強く風化した土砂状を呈するが、岩組織は残留する 割れ目は一部消滅しているが、多くは残留している また処々灰白色の粘土が脈状に分布する 割れ目は10~30°の低角度系が主体
14	14.84~24.44m: CL

標尺	標高	深度	柱状図	岩種区分	色調	岩級区分	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R	Q	D	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	記事
10				砂礫			100					0	0	・有機質土である。 ・分解途中の有機物を多く含む。 ・7.50~8.60m ・硬質じり砂である。 ・8.60~12.10m ・砂礫である。 ・一部有機質土の薄層を挟む。 ・12.10~12.49m ・砂である。 ・少量のくさり礫を含む。
				D'			100	1	0					
							100	1	0					
							100	11	11					12.49~14.07m ・粘質砂である。
							100	2	0					12.49~14.84m ・強風化部である。
							100	8	0					・土砂状を呈するが、岩組織は残っている。 ・灰白色の粘土脈を挟み、隙間である。
							100	10	10					17.44m ・割れ目扱いに、幅10~40mm砂状化している。
							100	4	0					

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
A	・“地質名”欄に基づき、花崗斑岩とその区間を記載。
13	・岩級については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 ・割れ目の傾斜については、補足的なものであるため削除。 ・岩組織や割れ目の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
14	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示しているため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深 (m)	岩種	色	割れ目 状態	風化 程度	変質	その他	硬軟区分		記事
								硬軟区分	硬軟区分	
15										<p>15.00~15.22m 低角度割れ目主体で、一部で割れ目ぞいに風化で砂状化が進んでいる。 18.30m以浅では処々マンガン鉱染伴う。 15.22~15.44mは硬さCの硬質岩片が残留している。</p>
16										<p>16.00~17.62m 割れ目周辺に硬さ「E」が部分的に分布する</p>
17										<p>16.75~16.84m φ30~40 m/mの硬さ「C」の硬質岩片が礫状に分布</p>
17										<p>17.44m 割れ目ぞいに幅10~40m/mが砂状化する</p>
18										<p>18.10~22.19m 上下に比べ割れ目少なくなる(IV)</p>
19										<p>18.31m 幅10m/mマンガン鉱染が脈状に分布、黒褐色化する</p>
20										<p>19.60m 割れ目ぞいに幅10m/m砂状化する</p>

記事内容
<p>15 全体に10~30°の低角度割れ目主体で、一部で割れ目ぞいに風化で砂状化が進んでいる。 18.30m以浅では処々マンガン鉱染伴う。 15.22~15.44mは硬さCの硬質岩片が残留している</p>
<p>16 16.00~17.62m間 割れ目周辺に硬さ「E」が部分的に分布する</p>
<p>16.75~16.84m φ30~40 m/mの硬さ「C」の硬質岩片が礫状に分布</p>
<p>17 17.44m 割れ目ぞいに幅10~40m/mが砂状化する</p>
<p>18 18.10~22.19m 上下に比べ割れ目少なくなる(IV)</p>
<p>19 18.31m 幅10m/mマンガン鉱染が脈状に分布、黒褐色化する</p>
<p>20 19.60m 割れ目ぞいに幅10m/m砂状化する</p>

標尺 m	標高 m	深 m	柱状 図	岩種 区分	色 調	岩級 区分	コア 採取 率 (%)	最大 コア 長 (cm)	R D (%)	コア採取率 ^(%)			記事
										R	Q	D	
							100	1	0				12.10~12.49m ・砂である。 ・少量のくさり礫を含む。 12.49~14.07m ・花崗岩質である。 12.49~14.86m ・強風化部である。 ・土砂状を呈するが、崩れ目は残っている。 ・灰白色の基岩脈を挟み、脈状である。
							100	11	11				17.44m ・割れ目沿いに、幅10~40mm砂状化している。
							100	2	0				21.16~22.01m ・割れ目沿いに、一部幅10~30mm砂状化している。
							100	8	0				
							100	10	10				
							100	4	0				
							100	14	14				
							100	7	0				
							100	14	14				

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
15	<ul style="list-style-type: none"> 全体に砂状化が進んでいるとの記載があるが、顕著な劣化部については、個別に別途記載することとしているため削除。 マンガンについては、補足的なものであるため削除。
16	<ul style="list-style-type: none"> 硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。
17	<ul style="list-style-type: none"> 変更なし
18	<ul style="list-style-type: none"> 割れ目の発達程度については、RQD、最大コア長、岩級区分に含めて示しているため削除。
19	<ul style="list-style-type: none"> マンガンについては、補足的なものであるため削除。
20	<ul style="list-style-type: none"> 割れ目沿いに砂状を呈するが、掘削時の機械割れと判断し削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	岩種区分	色調	細区分				硬さ	割れ目	備考
				割れ目	風化	変質	その他			
										21 21.16~22.01m間 割れ目ぞいに幅10~30m/mで砂状化する部分がある
										22 22.01~22.19m 硬さ「C」の硬質部が残留
										23 23.05~23.80m 20-30°と70-90° 割れ目が交差し一部で交差部周辺でφ10m/m程度に細片化。岩片も硬さ「E」まで軟化している
										24 24.16m以深では硬さ「E」も含む全体に脆い岩片多い
										25 24.44~24.71m D 風化で土砂状を呈する 岩組織や割れ目はほぼ消滅している
										26 24.71~26.62m: CL

記事内容
21 21.16~22.01m間 割れ目ぞいに幅10~30m/mで砂状化する部分がある
22 22.01~22.19m 硬さ「C」の硬質部が残留
23 23.05~23.80m 20-30°と70-90° 割れ目が交差し一部で交差部周辺でφ10m/m程度に細片化。岩片も硬さ「E」まで軟化している
24 24.16m以深では硬さ「E」も含む全体に脆い岩片多い
25 24.44~24.71m D 風化で土砂状を呈する 岩組織や割れ目はほぼ消滅している
26 24.71~26.62m: CL

標尺 (m)	標高 (m)	深度 (m)	柱状 図	岩種 区分	色調	岩級 区分	コア 採取 率 (%)	最大 コア 長 (cm)	R D (%)	コア採取率 (%)				記事
										R	Q	D	その他	
20						CL'	100	4	0					17.44m ・割れ目沿いに、幅10~40mm砂状化している。
							100	14	14					21 21.16~22.01m ・割れ目沿いに、一部幅10~30mm砂状化している。
							100	7	0					23 23.05~23.80m ・割れ目の交差部で、一部細片状を呈する。
							100	3	0					25 24.44~24.71m ・土砂状を呈する。
						CL'	100	9	0					
						D	100	6	0					27.10~27.60m ・砂状を呈する。
							100	9	0					

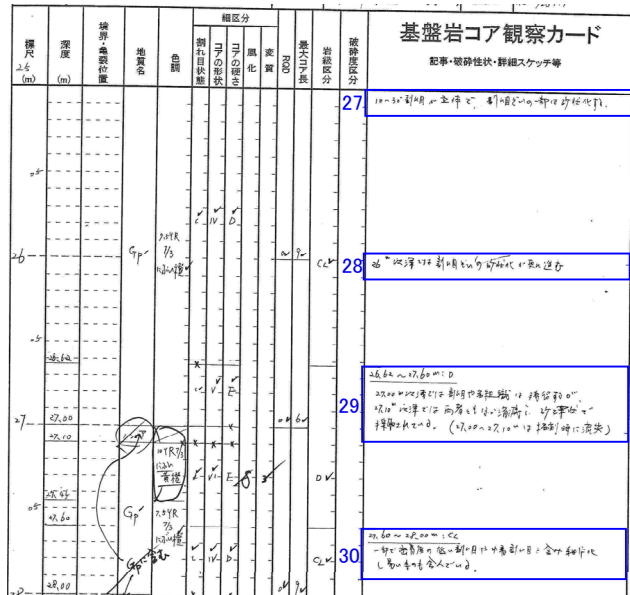
記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
21	・変更なし
22	・局所的に挟まれる硬質な岩片の記載については、補足的なものであるため削除。
23	・割れ目の傾斜については、補足的なものであるため削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示していることから削除。
24	・硬軟や脆弱さについては、RQD, 最大コア長, 岩級区分で示していることから削除。
25	・岩級については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・岩組織や割れ目の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
26	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示しているため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図



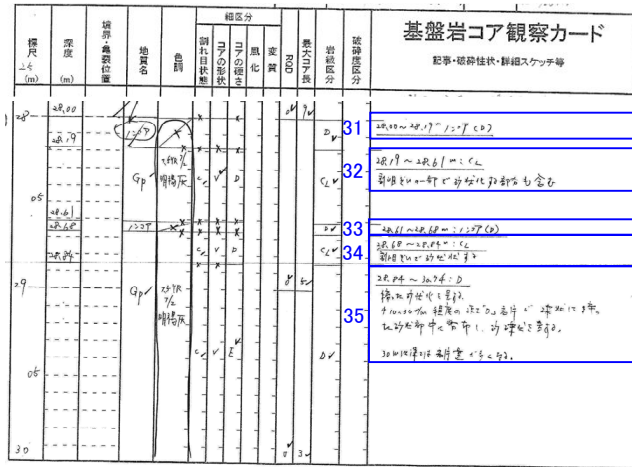
記事内容	
27	10~30° 割れ目が主体で割れ目ぞいの一部は砂状化する
28	26m以深では割れ目ぞいの砂状化が更に進む
29	26.62~27.60m: D 27.00m以浅では割れ目や岩組織は残留するが27.10m以深では両者ともほぼ消滅し砂礫状で採取されている。(27.00~27.10mは掘削時に流失)
30	27.60~28.00m: CL 一部で密着度の低い割れ目やゆる割れ目を含み細片化し易いものも含んでいる

標尺	標高	深度	柱状	岩種	色	岩級	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R	Q	D	最大コア長 (cm)	記事
m	m	m	図	区分	調	区分	(%)	(cm)	(%)	(%)	(%)	(cm)	
				花崗岩			100	5	0				24.44~24.71m ・土砂状を呈する。
						CL'	100	9	0				
						D'	100	6	0				27.10~27.60m ・砂礫状を呈する。
						D	100	5	0				29.94~30.74m ・詰まった砂礫状を呈する。
						明焼灰	100	3	0				
						Cl'	100	4	0				31.05~31.23m

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
27	・一部割れ目扱いで砂状化するが、掘削時の機械割れと判断し削除。
28	・一部割れ目扱いに砂状化するが、掘削時の機械割れと判断し削除。
29	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・27.00~27.10mのコア流失区間については、ポアホールテレビによる観察結果から、周囲の岩盤と明瞭な差が認められないため、コア写真で示すこととし削除。 ・割れ目や原岩組織の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
30	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・割れ目の密着状態については、補足的なものであるため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)



コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
31 28.00～28.19m ノンコア(D)
32 28.19～28.61m:CL 割れ目ぞいの一部で砂状化する部分も含む
33 28.61～28.68m ノンコア(D)
34 28.68～28.84m:CL 割れ目ぞいで砂状化する
35 28.84～30.74m:D 締った砂状化を呈する φ10～30m/m程度の硬さ「D」岩片が礫状に締った砂状部中に分布し砂礫状を呈する 30m以深では岩片量が多くなる

申請書用柱状図



記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
31	・コア欠区間については、ボアホールテレビによる観察結果から、周囲の岩盤と明瞭な差が認められないため、コア写真で示すこととし削除。
32	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・一部の割れ目沿いに砂状化するが、いずれの砂状化部も連続性に乏しいことから削除。
33	・コア欠区間については、ボアホールテレビによる観察結果から、周囲の岩盤と明瞭な差が認められないため、コア写真で示すこととし削除。
34	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・割れ目沿いに砂状化するが、掘削時の機械割れと判断し削除。
35	・岩級については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・岩片量の傾向については、当該区間の周囲と明確な差異がないため削除。

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 30 (m)	深度 (m)	地質名	色調	岩級区分				硬軟度区分	記事
				割れ目	長石	石英	斑晶		
30.17	30.50							36	30.17～30.50mはマンガン鉱染伴う。
30.30	30.53							37	30.30～30.53m 石英多く晶出(一部は変質による2次石英と推定される)
30.74	32.48							38	30.74～32.48m: CL 硬さ「D」主体だが部分的に硬さ「E」も含む 上端側の30.74～31.30m間は風化による黄褐色化が進むが軟化は伴わない
31.05	31.23							39	31.05～31.23m 熱水変質による粘土化変質、珪化変質が著しく、前者では白色系粘土、後者では石英が脈状・晶洞状に晶出している。また、マンガン鉱染と風化も伴わない全体として黄褐色の濃い色調を呈する
31.70	32.20							40	31.70～32.20m 割れ目ぞいの砂状化が進み「砂混じり岩片状」を呈する。岩片はφ10～30m/m程度の硬さ「D」で残留するが全体にやゝ上下に比べ脆くなる
32.48	32.70							41	32.48～32.70m: D 岩組織と割れ目はほぼ残留している。
32.70	34.54							42	32.70～34.54m: CL 割れ目ぞいに厚さ1～2m/m程度で薄く砂状化部をはさむ。一部で砂状化が進行する部分もある。白濁化した長石多い。割れ目は10～20°が主体、一部で70～80° 割れ目と交差

記事内容
36 30.17～30.50mはマンガン鉱染伴う。
37 30.30～30.53m 石英多く晶出(一部は変質による2次石英と推定される)
38 30.74～32.48m: CL 硬さ「D」主体だが部分的に硬さ「E」も含む 上端側の30.74～31.30m間は風化による黄褐色化が進むが軟化は伴わない
39 31.05～31.23m 熱水変質による粘土化変質、珪化変質が著しく、前者では白色系粘土、後者では石英が脈状・晶洞状に晶出している。また、マンガン鉱染と風化も伴わない全体として黄褐色の濃い色調を呈する
40 31.70～32.20m 割れ目ぞいの砂状化が進み「砂混じり岩片状」を呈する。岩片はφ10～30m/m程度の硬さ「D」で残留するが全体にやゝ上下に比べ脆くなる
41 32.48～32.70m: D 岩組織と割れ目はほぼ残留している。
42 32.70～34.54m: CL 割れ目ぞいに厚さ1～2m/m程度で薄く砂状化部をはさむ。一部で砂状化が進行する部分もある。白濁化した長石多い。割れ目は10～20°が主体、一部で70～80° 割れ目と交差

標尺 m	深度 m	柱状 図	岩種 区分	色調	岩級 区分	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R Q D (%)	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	記事
					CL'	100	4	0			
					D'	100	6	0			39
					CL'	100	14	14			40
					CL'	100	4	0			
					D'	100	4	0			
					CL'	100	9	0			
					D'	100	7	0			
					CL'	100	5	0			
					CL'	100	4	0			

31.05～31.23m
・変質し、白色粘土化している。
31.70～32.20m
・割れ目ぞいに砂状化し、砂混じり岩片状を呈する。
33.40m
・割れ目ぞいに幅20mm砂状化している。
34.54～34.59m
・破砕部である。カタクレサイトからなる。
にぶい黄褐色の粘土混り角礫状を呈する。
・灰黄褐色砂混じり粘土；累計厚4mm
・走向・傾斜はN25°E45°Wである。
・傾斜は11°である。
・上盤境界の傾斜は10°～40°、下盤境界の傾斜は11°である。

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
36	・マンガンについては、補足的なものであるため削除。
37	・一般的な岩相であり、石基及び斑晶の種類、粒径等については、特に目立つ区間のみ記載することとしており、特に目立つ区間ではないため削除。
38	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・色調については、補足的なものであるため削除。
39	・鉱物の晶出やマンガンについては、補足的なものであるため削除。 ・色調については、補足的なものであるため削除。
40	・砂混じり岩片状部の岩片の粒径、硬軟については、補足的なものであるため削除。
41	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・岩組織や割れ目の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
42	・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 ・一部で砂状化が見られるが、掘削時の機械割れと判断し削除。 ・長石の白濁化については、風化・変質に関する補足的なものであるため削除。 ・割れ目の傾斜については、補足的なものであるため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

標尺 30 (m)	深度 (m)	境界 位置	地質名	色	相区分				崩壊 区分	破砕 区分	記事 番号
					割れ 目の 形状	割れ 目の 傾斜	風 化	変 質			
											43
											44
											45
											46
											47
											48

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
43 33.17m で15° 割れ目が75° 割れ目を切っている(変位量10 m/m、右ズレ)
44 33.40m 15° 割れ目ぞいに厚さ20 m/m砂状化
45 33.76m 5° 割れ目ぞいに厚さ10 m/m砂状化 34.00m以深、密着度の低いゆる割れ目多くハンマーの打撃で細片化する。また、割れ目も消滅しかかっている 34.03m 40° 幅2~3 m/m石英脈、密着して連続
46 ●34.54~34.59m 破砕帯・主せん断面34.59m(11°) 34.54~34.59mHj
47 上端10~40° で大きく湾曲、下端11° で直線的に連続φ5m/mGp岩片主体で岩片間は粘土状~砂状で「粘土混じり岩片状」呈する。色調はにぶい黄橙(10YR6/3)厚さ40~50m/m 34.59m: Hc-2
48 上下端とも11° で直線的に連続。φ1m/m石英粒を10%程度含む、色調は灰黄褐(10YR5/2)厚さ3~4m/m

申請書用柱状図

標尺 m	深度 m	柱状 図	岩種 区分	色	岩 級 区 分	コア 採取 率 (%)	最大 コア 長 (cm)	R Q D (%)	コア採取率 (%)			記事	
									R	Q	D		
				灰		100	4	0					
				黄褐(10YR5/2)	CL'	100	3	0					31.05~31.23m ・実質し、白色粘土化している。
				明褐色	D'	100	6	0					31.70~32.20m ・割れ目沿いに砂状化し、砂混じり岩片状を呈する。
				明褐色	CL'	100	14	14					33.40m ・割れ目沿いに幅20mm砂状化している。
				明褐色	D'	100	4	0					●34.54~34.59m ・破砕部である。カタクレーサイトからなる。
				明褐色	CL'	100	4	0					にぶい黄褐色の粘土混り角礫状を呈する。
				明褐色	D'	100	9	0					・灰黄褐色砂混じり粘土: 累計厚4mm
				明褐色	CL'	100	7	0					・走向・傾斜はN25° E45° Wである。
				明褐色	CL'	100	5	0					・傾斜は11° である。
				明褐色	CL'	100	4	0					・上盤境界の傾斜は10° ~40°、下盤境界の傾斜は11° である。

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
43	・15° 割れ目が75° 割れ目を切っているとの記載については、周囲の岩盤に劣化が認められないことから削除。
44	・割れ目の傾斜については、補足的なものであるため削除。
45	・割れ目沿いの砂状化については、掘削時の機械割れと判断し削除。 ・割れ目の密着度、鉱物脈については補足的なものであるため削除。 ・割れ目も消滅しかかっているとの記載については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。 ・石英脈については、補足的なものであるため削除。
46~48	・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。 ・表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混り角礫状) ・φ1mm石英粒を10%程度含むとの記載に基づき、砂混り粘土状と記載。 ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類については、補足的なものであるため削除。 ・破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hj区間の幅については削除。 ・境界の直線性については、申請書では記載しないこととしているため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	境界位置	地質	細区分		割れ目状態	色調	R	Q	D	D _{max}	記事
				割れ目状態	色調							
35.59	35.37											49
35.37	37.15											50
36.09	36.26											51
36.70	42.00											52
37.80												53
38.56	38.74											54

記事内容
34.59~35.37m: CL 細片化し易いゆ着割れ目が多い
35.37~37.15m: D 軟化著しく硬さ「E」主体であるが岩組織や割れ目はほぼ残留している。部分的に硬質岩片を中石的に含む 33-36mコアなし(CTスキャン?)
36.09~36.26m、36.53~36.62mには硬さ「C」の硬質部が残留する。
36.70m以深でφ10~30m/mの硬さ「D」ないし「C」の岩片が礫状に残留する。
37.15~42.00m: CL 0~30° 割れ目主体で、割れ目ぞいの一部で砂状化する部分も含む。
37.80m 5° 割れ目ぞい幅10~20m/m砂状化、微細な黄鉄鉱が晶出している。
38.56~38.74m間、φ20~30mの硬さ「C」岩片が残留する。
39.26~39.70m 硬さ「C」のφ30~50m/m岩片が多く残留する。
39.90m 幅10~20m/m、0° で淡緑色部が分布(緑泥石濃集部と推定される)。

標尺 (m)	深度 (m)	柱状図	岩種区分	色調	岩級区分	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R (%)	Q (%)	D (%)	最大コア長 (cm)	記事
					CL'	100	4	0				●34.54~34.59m ・破砕部である。カタクレサイトからなる。
					D'	100	9	0				・にぶい黄褐色の粘土混り角礫状を呈する。 ・灰黄褐色砂混じり粘土: 累計厚4mm ・走向・傾斜はN25° E46° Wである。 ・傾斜は11°である。 ・本盤境界の傾斜は10°~40°、下盤境界の傾斜は11°である。
					CL'	100	5	0				50
						100	4	0				52 35.37~37.15m ・著しく軟質化している。
												53 ・割れ目沿いに、幅10~20m砂状化している。
												54 40.32~40.77m ・砂礫状を呈する。

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
49	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 ・割れ目の密着状態については、補足的なものであるため削除。
50	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 ・岩組織や割れ目の残留の程度、中石的に含むとの記載については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
51	<ul style="list-style-type: none"> ・33-36mコアなし(CTスキャンへ)との記載については、破砕部を含むコア箱を観察カード作成に先立ち、分析工程へ回したことをメモした補足的なものであるため削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示しているため削除。 ・割れ目沿いに砂状化するが、いずれの砂状化部も連続性や直線性に乏しいことから削除。
52	<ul style="list-style-type: none"> ・割れ目の傾斜、割れ目沿いの鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
53	<ul style="list-style-type: none"> ・岩片が残留するとの記載については、軟質な区間中にみられる局所的な硬質部の存在を記述したものであり、補足的なものであるため削除。
54	<ul style="list-style-type: none"> ・色調、鉱物の濃集については、補足的なものであるため削除。

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

深度 (m)	層名	地質記号	色	質	R	Q	D	細区分			記事	
								割れ目	岩組織	変質		
40.32	40.77											
41.50	42.00											
41.95	42.00											
42.00	42.41											
42.24	42.28											
42.24	42.28											

記事内容
55 40.32～40.77m 割れ目ぞいの砂状化進む。硬さ「D」ないし「C」の岩片がそのなかに残留し、全体として砂礫状を呈し、上下に比べやや脆くなる。
56 41.50m 2° 割れ目ぞい幅30m/m淡緑色化(緑泥石化)し、φ0.5～1m/mの微細な黄鉄鉱が晶出している。
57 41.95～42.00mはコアチューブ引上時に壊され礫状コア化したもの、硬さは「D」42.00～42.41m:D 一部の割れ目と岩組織は残留している。
58 -42.24～42.28m、上端15°、下端18° 割れ目に囲まれ、厚さ30m/m軟質・淡黄色粘土化(変質度4)
59 ・幅1m/m白色粘土脈も処々に点在する。

標尺	標高	深度	柱状	岩種	色調	岩級区分	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	R	Q	D	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	記事
							100	8	0			55	40.32～40.77m	・砂礫状を呈する。
							100	4	0			58	42.24～42.28m	・変質し、淡黄色粘土化している。
							100	2	0				42.41～42.43m	・掘削部である。
							100	2	0					・右ずれ正断層センスである。
							100	1	0					・にぶい黄褐色の硬泥り粘土・灰白色の硬質粘土状～にぶい黄褐色の粘土混じり礫状を呈する。
							100	1	0					・にぶい黄褐色硬泥り粘土 累計厚15mm
							100	1	0					・走向・傾斜はN65° W36° Nである。
							100	2	0					・傾斜は54°である。
							100	1	0					・上盤境界の傾斜は53°、下盤境界の傾斜は18°である。

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
55	・割れ目沿いに砂状化するが、いずれの砂状化部も連続性や直線性に乏しいことから削除。 ・砂礫状部を構成する岩片の硬軟については、補足的なものであるため削除。
56	・割れ目の傾斜、割れ目沿いの変色、鉱物の晶出については、補足的なものであるため削除。
57	・礫状コア化については、掘削時の機械割れによるものと判断し削除。 ・岩級及びその区分については、“岩級区分”欄で示しているため削除。 ・割れ目や岩組織の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。
58	・変質している区間の見かけの傾斜については、補足的なものであるため削除。 ・幅の記載については、区間長を記載しているため削除。
59	・一部で粘土脈を挟在するが、いずれも連続性や直線性に乏しいことから削除。

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

深度 (m)	地層 名称	地層 番号	地層 位置	細区分						破砕区分	備考
				粘土質砂	砂質粘土	シルト質粘土	シルト質砂	シルト質砂	シルト質砂		
60											
61											
62											
63											

基盤岩コア観察カード	
記事・破砕性状・詳細スケッチ等	
60	42.41~42.49m: 破砕帯(主せん断面42.43m)
61	42.41~41.43m: Hc-2 上下端各々63°、54°で波打って連続、φ1~2m/m石英粒はわずか、Gp岩片計10%程度含む軟質粘土(ガウジ)、色調はにぶい黄褐(10YR5/3)、厚さ10~15m/m
62	41.43~42.45m: Hb 上端54°、下端35°でいずれも波打って連続、φ1~2m/m石英粒、φ5~10m/m粘土化Gp岩片計20~30%含む軟質な礫質粘土状、色調は灰白色(2.5Y8/2)、厚さ5~10m/m
62	42.45~42.49m: Hj 上端35°、下端18°でいずれも波打って連続、下端の一部はやゝ不明瞭。φ5~20m/mの岩片からなり、岩片の一部は粘土状~砂状。全体的に「粘土混じり岩片状」呈する。色調はにぶい黄橙(10YR6/3)、厚さ40m/m
63	42.49~44.24m: D 著しく軟化するが岩組織と割れ目の一部は残留している。 43.45~43.48m 厚さ25m/m・23°の石英脈が硬質で分布

記事内容	
60	●42.41~42.49m: 破砕帯(主せん断面42.43m)
61	42.41~41.43m: Hc-2 上下端各々63°、54°で波打って連続、φ1~2m/m石英粒はわずか、Gp岩片計10%程度含む軟質粘土(ガウジ)、色調はにぶい黄褐(10YR5/3)、厚さ10~15m/m
62	41.43~42.45m: Hb 上端54°、下端35°でいずれも波打って連続、φ1~2m/m石英粒、φ5~10m/m粘土化Gp岩片計20~30%含む軟質な礫質粘土状、色調は灰白色(2.5Y8/2)、厚さ5~10m/m
62	42.45~42.49m: Hj 上端35°、下端18°でいずれも波打って連続、下端の一部はやゝ不明瞭。φ5~20m/mの岩片からなり、岩片の一部は粘土状~砂状。全体的に「粘土混じり岩片状」呈する。色調はにぶい黄橙(10YR6/3)、厚さ40m/m
63	42.49~44.24m: D 著しく軟化するが岩組織と割れ目の一部は残留している。 43.45~43.48m 厚さ25m/m・23°の石英脈が硬質で分布

標高	深度	柱状	岩種	色調	岩級区分	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	R	Q	D	最大コア長(%)	記事
50	42.41		明層状	にぶい黄	CL'	100	8	0				40.32~40.73m ・砂礫状を呈する。 42.24~42.28m ・変質し、淡黄色粘土化している。 ●42.41~42.49m ・破砕帯である。 ・右ずれ正断層センスである。 ・にぶい黄褐色の礫混り粘土状~灰白色の礫質粘土状~にぶい黄褐色の粘土混じり礫状を呈する。 ・にぶい黄褐色礫混り粘土 累計厚15mm ・走向・傾斜はN65°W36°Nである。 ・傾斜は54°である。 ・上盤境界の傾斜は63°、下盤境界の傾斜は18°である。 ●44.24~44.53m ・破砕帯である。カタクレーサイトからなる。 ・灰黄色の粘土状~灰黄~灰褐~淡黄色の粘土混じり礫状を呈する。 ・灰黄色粘土：累計厚2mm ・走向・傾斜はN1°E89°Nである。 ・傾斜は35°である。 ・上盤境界の傾斜は5°~13°、下盤境界の傾斜は70°である。 ●44.53~44.83m ・破砕帯である。カタクレーサイトからなる。 ・灰黄色の粘土状~明赤灰~灰白色の礫質粘土状~にぶい橙~灰白~淡黄色の粘土混じり礫状を呈する。 ・灰黄色粘土：累計厚5mm ・走向・傾斜はN66°Eである。 ・傾斜は65°である。 ・上盤境界の傾斜は70°、下盤境界の傾斜は75°~85°である。 ●45.36~45.93m
	42.41		にぶい黄		CL'	100	4	0				
	42.41		にぶい黄		CL'	100	2	0				
	42.41		にぶい黄		D'	100	1	0				
	42.41		にぶい黄		D'	100	1	0				
	42.41		にぶい黄		D'	100	1	0				
	42.41		にぶい黄		CL'	100	2	0				
	42.41		にぶい黄		D'	100	1	0				
	42.41		にぶい黄		D'	100	4	0				
	42.41		にぶい黄		CL'	100	6	0				
	42.41		にぶい黄		D'	100	5	0				
	42.41		にぶい黄		D'	100	2	0				
	42.41		にぶい黄		D'	100	5	0				
	42.41		にぶい黄		CL'	100	6	0				
	42.41		にぶい黄		D'	100	5	0				
	42.41		にぶい黄		D'	100	2	0				
	42.41		にぶい黄		CL'	100	8	0				

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
60~62	<ul style="list-style-type: none"> 薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混じり礫状) Gp岩片計10%程度含むとの記載に基づき、礫混り粘土状と記載。 粘土の累計幅については、最大値を記載。 ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、HbやHj区間の幅については削除。 境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。
63	<ul style="list-style-type: none"> 岩級及びその区間については、“岩級区分”欄で示していることから削除。 割れ目や岩組織の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。 石英脈については、補足的なものであるため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

層番号	深度	地層	地質	細区分		観察項目	備考
				細区分	細区分		
64	44.24	44.53	破砕帯				
65	44.31		Hb				
66	44.66		Hc-1				
67	44.53	44.83	破砕帯				
68	44.66		Hj				
69	44.68		Hc-1				
70	44.70		Hb				

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
64 ●44.24～44.53m:破砕帯(主せん断面44.31m) 44.24～44.31m:Hb 上端、幅1m/灰赤色軟質粘土で5～13°で湾曲して、下端35°で少し湾曲して連続。φ2～3m/m石英粒、φ5～10m/m(最大25m/m)Gp岩片を30%程度含む半固結状の「礫質粘土」、色調は灰黄(2.5Y7/2)、厚さ45～65m/m。
65 44.31m:Hc-1 上下端とも35°で直線的に連続、φ1m/mの石英粒をごくわずか(5%以下)含む軟質な粘土(ガウジ)。色調は灰黄褐色(10YR4/2)、厚さ1～2m/m
66 44.31～44.53m:Hj 上端35°で直線的に、下端70°で波打って連続。φ5m/m前後の粘土化したGp岩片と岩片間は白色軟質の脈状～網状粘土脈からなる粘土混じり岩片状からなる。色調は灰褐(7.5Y6/2)～淡黄(2.5Y8/3)、厚さ140～200m/m
67 ●44.53～44.83m:破砕帯(主せん断面44.66m) 44.53～44.66m:Hj 上端70°で波打って、下端65°で直線的に連続。φ5～10m/m粘土化岩片と岩片間の軟質白色粘土(脈状主体)からなり粘土混じり岩片状を呈する。色調はにぶい橙(7.5YR7/4)～灰白色(2.5Y8/2)、厚さ55m/m。 44.66～44.68m:Hc-1 55°で上端直線的、下端は一部で波打って連続。φ1m/m石英粒ごく少量(5%以下)含む軟質粘土(ガウジ)、上下端側に主せん断面と同方向に幅1～2m/m、長さ5～10m/mの脈状のマンガニ染染部を伴う。 色調は灰黄褐色(10YR4/2)、厚さ4～5m/m
68 44.68～44.70m:Hb 上端65°で一部波打って、下端50～70°で湾曲して連続。φ2m/m石英粒φ3～5m/m粘土化岩片を計20～30%含む半固結状の礫質粘土状を呈する。色調は明赤灰(2.5Y7/2)～灰白色(5YR8/1)、厚さ10～20m/m
69 44.70～44.83m:Hj 上端50～70°、下端75～85°でいずれも湾曲して連続。下端は幅1m/m以下の灰黄褐色(10YR4/2)軟質粘土脈。φ5～10m/m粘土化岩片と岩片間の脈状～網状白色～浅黄色軟質粘土脈からなり、全体として、粘土混じり岩片状を呈する。色調は灰褐(7.5YR6/2)～淡黄色(2.5Y8/3)、厚さ20～50m/m。岩片間の基質部には黒褐色のマンガニ染染部が点在する。

申請書用柱状図

標尺	柱状図	岩種区分	色調	岩級区分	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	R	Q	最大コア長	コア採取率	記事
0											
10											
20											
30											
40											
50											
60											

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
64～66	<ul style="list-style-type: none"> ・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。 ・表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混じり礫状) ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 ・破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、HbやHj区間の幅については削除。 ・境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。
67～70	<ul style="list-style-type: none"> ・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。 ・表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混じり礫状) ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率、マンガニについては、補足的なものであるため削除。 ・破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、HbやHj区間の幅については削除。 ・境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	コア番号	採取位置	地層	細区分				岩質	RQD	岩層区分	観察区分	記事内容
					崩れ目	層理	風化	割れ目					
6.0	54.36			花崗岩							71	44.83~45.36m: D	
	54.39			花崗岩							72	●45.36~45.39m: 破砕帯(主せん断面45.39m)	
	54.53			花崗岩							73	45.36~45.39m: Hj	
	54.61			花崗岩							74	45.39~46.12m: D	

記事内容
71 44.83~45.36m: D
72 ●45.36~45.39m: 破砕帯(主せん断面45.39m)
73 45.36~45.39m: Hj 上端や不明瞭で62°で波打って、下端は65°で直線的に連続。φ5m/前後の細かい岩片からなり、岩片間の一部が粘土化。全体的に「粘土混じり岩片状」を呈する。色調はにぶい橙(7.5YR7/3)、厚さ5~10m/m。 45.39m: Hc-2 上下端とも65°で直線的に連続。一部で厚さ1m/mの2本のガウジに分枝~取れんする。φ1~2m/m石英粒5~10%含む軟質粘土(ガウジ)。色調は灰褐色(7.5YR6/2)、厚さ2m/m
74 45.39~46.12m: D 幅1m/前後の軟質な白色粘土脈が多い。

標尺	深度	柱状	岩種	色調	岩級区分	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	R	Q	D	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	記事
50	54.36		花崗岩	にぶい橙	D'	100	4	0					●44.24~44.53m 破砕部である。カタクレーサイトからなる
	54.39		花崗岩	にぶい橙	CL'	100	6	0					灰褐色の粘土状~灰黄~灰褐~淡黄色の粘土混じり様状を呈する。
	54.53		花崗岩	にぶい橙	D'	100	2	0					灰褐色粘土: 累計厚2mm 走向・傾斜はN11° E89° Wである。 傾斜は5°である。
	54.61		花崗岩	にぶい橙	D'	100	4	0					上盤境界の傾斜は5°~13°、下盤境界の傾斜は70°である。
	54.61		花崗岩	にぶい橙	CL'	100	3	0					●44.53~44.83m 破砕部である。カタクレーサイトからなる
	54.61		花崗岩	にぶい橙	CL'	100	5	0					灰褐色の粘土状~明黄~灰白色の硬質粘土状~にぶい橙~灰白~淡黄色の粘土混じり様状を呈する。
	54.61		花崗岩	にぶい橙	CL'	100	6	0					灰褐色粘土: 累計厚5mm 走向・傾斜はN56° Eである。 傾斜は65°である。
	54.61		花崗岩	にぶい橙	CL'	100	2	0					上盤境界の傾斜は70°、下盤境界の傾斜は75°~85°である。
	54.61		花崗岩	にぶい橙	D'	100	13	13					●45.36~45.39m 破砕部である。カタクレーサイトからなる
	54.61		花崗岩	にぶい橙	CM'	100	10	10					灰褐色の砂質粘土状~にぶい橙色の粘土混じり様状を呈する。
	54.61		花崗岩	にぶい橙	D'	100	10	10					灰褐色砂質粘土: 2mm 走向・傾斜はN43° E70° Eである。 傾斜は65°である。
	54.61		花崗岩	にぶい橙	CM'	100	16	16					上盤境界の傾斜は52°、下盤境界の傾斜は65°である。
	54.61		花崗岩	にぶい橙	CL'	100	9	9					

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
71	・岩級とその区間については「岩級区分」欄に示しているため削除。
72, 73	<ul style="list-style-type: none"> ・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。 ・表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混じり様状) ・φ1~2mmの石英粒5~10%含むとの記載があるが、より径の小さい砂粒子も含むため、砂質粘土状と記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 ・破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hj区間の幅については削除。 ・境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。
74	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその区間については、「岩級区分」欄で示していることから削除。 ・粘土脈については、いずれも直線性や連続性に乏しいことから削除。

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	コア番号	採取位置	地層	細区分				採取深度 (m)	観察深度 (m)	基盤岩コア観察カード 記号・破砕性状・詳細スケッチ等
					粘土質岩片	粘土質岩片	風化	崩壊			
47	46.12		Gp						75		●46.12～46.17m:破砕帯(主せん断面46.17m)
	46.17								76		46.17m:Hc-2
	46.73								77		46.73m:55°せん断割れ目:幅10m赤褐色粘土伴う。
	47.40								78		●47.40～47.51m:破砕帯(主せん断面47.40m)
	47.51								79		47.51m:Hb

記事内容
75 ●46.12～46.17m:破砕帯(主せん断面46.17m) 46.12～46.17m:Hj 上端31°でやや不明瞭ながら直線的に、下端35～70°で大きく湾曲して連続。 φ5～10m/m粘土化岩片が粘土化基質中に礫状に分布。全体に「粘土質岩片状」呈する。主せん断面と平行して細かい割れ目や白色粘土細脈「厚さ1m/m」が分布。色調は淡黄色(2.5Y8/3)、厚さ35m/m
76 46.17m:Hc-2 上下端とも35～70°で大きく湾曲して連続。φ1～2m/m石英粒、φ3m/m粘土化岩片を20～30%含む半固結状の粘土(ガウジ)、色調は黒褐(10YR3/1)、厚さ2～10m/m
77 46.17～47.40m:D 46.73m、55°せん断割れ目:幅10m赤褐色粘土伴う。
78 ●47.40～47.51m:破砕帯(主せん断面47.40m) 47.40m:Hc-1 上下端とも58°で直線的に連続。φ1m/m石英粒を5%程度含むやや軟弱な粘土(ガウジ)。色調は灰褐色(7.5YR5/2)、厚さ1～2m/m
79 47.40～47.51m:Hb 上端58°、下端55°でいずれも直線的に連続。φ2～3m/m石英粒を20～30%含む軟質な「礫質粘土状」を呈する。岩片は認められない。 色調は黄褐色(10YR5/6)、厚さ70m/m

標尺	深度	柱状	岩種	色調	岩級区分	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	R	Q	最大コア長(cm)	記事
70	46.12					100	9	0			●46.12～46.17m 破砕部である。カタクレーサイトからなる 黒褐色の硬凝じり粘土状～淡黄色の粘土混じり礫状を呈する。 黒褐色硬凝じり粘土:累計厚10mm 走向・傾斜はN44°E79°である。 傾斜は35°～70°である。 上盤境界の傾斜は31°、下盤境界の傾斜は35°～70°である。
	46.17					100	12	12			75, 76
	46.73					100	3	0			
	47.40					100	10	10			78, 79
	47.51					100	9	0			
	47.51					100	6	0			
	47.51					100	8	0			
	47.51					100	6	0			
	47.51					100	3	0			
	47.51					100	4	0			
	47.51					100	5	0			
	47.51					100	5	0			
	47.51					100	7	0			

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
75, 76	<ul style="list-style-type: none"> カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。 表現の見直し(粘土質岩片状→粘土混じり礫状) φ1～2mmの石英粒、φ3mm粘土化岩片を20～30%含むとの記載があるが、粘土化岩片と基質の粘土との境界が不明瞭であることから、礫混じり粘土状と記載。 粘土の累計幅については、最大値を記載。 ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hj区間の幅については削除。 境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。
77	<ul style="list-style-type: none"> 岩級とその区間については「岩級区分」欄に示しているため削除。 割れ目の傾斜については、補足的なものであるため削除。 粘土を挟在するが、直線性に乏しいことから削除。 せん断割れ目については、粘土の連続性に乏しく、変位基準も不明瞭で、周囲の割れ目と差異が認められないことから削除。
78, 79	<ul style="list-style-type: none"> 薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 粘土の累計幅については、最大値を記載。 破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 破砕度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hb区間の幅については削除。 境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

標尺	深度	地層	地質	傾斜	方位	細区分								備考			
						割れ目の形状	割れ目の長さ	割れ目の方向	割れ目の密度	割れ目の傾斜	割れ目の方位	割れ目の種類	割れ目のその他				
47	47.51~47.80																80
	47.80~48.80																
	48.80~49.17																
	49.17~49.27																81
49	49.27~49.49																
	49.49~49.77																82
	49.77~49.97																83

コア観察カードの仮ワープロ変換

記事内容
47.51~47.80m: D 岩組織と多くの割れ目は消滅せずに残留している。 砂、マンガンなどの挟在物をもつ割れ目が多い。
47.80~48.80m: CL 20~30° 割れ目ぞいに著しく軟化した硬さ「E」も処々に分布する。 白色粘土細脈やマンガン鉱染を伴う。
48.80~49.17m: D 著しく軟化するも岩組織と割れ目の一部が残留している。 ・49.06mに62° のせん断割れ目(sj)が分布。挟在物のない平滑な割れ目。
●49.17~49.27m: 破碎帯(主せん断面49.20m)
49.17~49.20m: Hb 上端25° で波打って、下端30~36° で湾曲して連続。φ2~3m/m石英粒、φ5m/m粘土化岩片を計20~30%含む軟質「礫質粘土状」呈する。 色調は灰白(2.5Y8/2)~明黄褐(10YR7/6)、厚さ10~25m/m。
49.20~49.22m: Hc-2 上端30~36°、下端35~60° でいずれも湾曲して連続。φ1~2m/m石英粒を5~10%含む軟質粘土(ガウジ)、色調は明黄褐色(10YR7/6)、厚さ7~15m/m
49.22~49.27m: Hj 上端35~60° で湾曲し、下端23° で波打って連続。φ2~4m/m石英粒、φ5~10m/m岩片(硬さ「D」「C」)と岩片間の粘土~砂状部からなり、全体として「粘土-砂混じり岩片状」呈する。色調はにぶい黄橙(10YR6/4)、厚さ50m/m(コア長)

申請書用柱状図

標尺	深度	柱状	岩種	色調	岩級	コア採取率(%)	最大コア長(cm)	R	コア採取率(%)				記事	
									Q	D	R	D		
	47.40~47.51		灰褐色			100	6	0	0	0	0	0	0	●47.40~47.51m ・破碎部である。 ・正断層センスである。 ・灰褐色の粘土状~黄褐色の礫質粘土状を呈する。
	47.51~47.80		灰褐色			100	8	0	0	0	0	0	0	・灰褐色粘土 2m ・走向・傾斜はN21° E34° Eである。 ・傾斜は58° である。 ・上盤境界の傾斜は58°、下盤境界の傾斜は65° である。
	48.80~49.17		灰褐色		D'	100	3	0	0	0	0	0	0	●49.17~49.20m ・破碎部である。 ・右ずれセンスである。 ・明黄褐色の砂混じり粘土状~灰白~明黄褐色の礫質粘土~砂混じり粘土を呈する。 ・明黄褐色砂混じり粘土 累計厚15m ・走向・傾斜はN47° E45° Wである。 ・傾斜は30° ~36° である。 ・上盤境界の傾斜は25°、下盤境界の傾斜は23° である。
	49.17~49.27		灰褐色		D	100	4	0	0	0	0	0	0	
	49.20~49.22		灰褐色		D	100	5	0	0	0	0	0	0	
	49.22~49.27		灰褐色		CL'	100	7	0	0	0	0	0	0	

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
80	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級とその区間については“岩級区分”欄に示しているため削除。 ・割れ目や岩組織の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。 ・一部で砂や粘土を挟在するが、いずれも連続性に乏しいことから削除。 ・割れ目の傾斜、マンガン、割れ目の挟在物の有無については、補足的なものであるため削除。 ・せん断割れ目との記載があるが、割れ目が不明瞭で、周囲の岩盤の劣化に系統性も認められないことから削除。
81~83	<ul style="list-style-type: none"> ・深度49.17~49.27m→49.17~49.20m(ただし、申請後の再観察で49.17~49.22mが正。*2深度の見直しに伴い、下端境界の傾斜も修正。*4) ・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・表現の見直し(粘土・砂混じり岩片状→粘土混じり礫状) ・φ1~2mm石英粒を5~10%含むとの記載に基づき、砂混じり粘土状と記載。 ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破碎部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 ・破碎度区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、HbやHj区間の幅については削除。 ・境界の直線性、破碎部の硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。

コア観察カード
(H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

深尺 (m)	深度 (m)	境界 番号 記号	地層 名	色調	割れ目性状				風化 程度	変質 程度	RQD	岩種 区分	破砕度 区分	記事 番号
					割れ目の 性状	割れ目の 性状	割れ目の 性状	割れ目の 性状						
49.27	49.27													
49.40	49.40													
51.06	51.06													
51.24	51.24													
51.63	51.63													
51.94	51.94													
52.16	52.16													
52.32	52.32													
52.50	52.50													

記事内容
49.27～49.40m: D 20～30° 割れ目が多く残留するが割れ目ぞいに風化・砂状化が進む
49.40～51.94m: CL 硬さ「C」の岩片が主体で一部に軟化した「D」も含む、30°前後の割れ目が主体で、一部でこれに直交～斜交する60°前後の割れ目が分布 51.06m以深では風化と変質は軽微となる。硬さ「B」と堅硬な岩片も混える。
51.06～51.94m 割れ目や密着度が低いゆ着割れ目が多い、ゆ着割れ目も褐色化している。
51.24～51.62mでは割れ目挟雑物は殆んど分布しない。 これ以外では割れ目ぞいに1m/m砂状化するものが多い。 処々に幅0.5～1m/mで密着した石英脈が分布。
51.63m、15° 割れ目ぞい厚さ10m/mが砂状化
51.94～52.72m: D 著しく軟化するが岩組織と割れ目は残留している。 52.16m、23° 厚さ30m/mの軟質褐色粘土脈、上端にマンガン伴う。 52.32～52.50mは硬さ「D」が主体。

標尺	深度	柱状	岩種	色調	岩級	コア採取率 (%)	最大コア長 (cm)	R	Q	最大コア長 (cm)	記事
			灰褐色		D	100	6	0			●47.40～47.51m ・破砕部である。 ・正断層センスである。 ・灰褐色の粘土状～黄褐色の硬質粘土状を呈する。
			灰褐色		D	100	8	0			・灰褐色粘土・2mm ・走向・傾斜はN21° E84° Eである。 ・傾斜は55°である。 ・上盤境界の傾斜は58°、下盤境界の傾斜は65°である。
			灰褐色		D	100	3	0			●49.17～49.20m ・破砕部である。 ・明黄褐色の砂混じり粘土状～灰白～明黄褐色の硬質粘土～粘土混じり礫状を呈する。
			灰褐色		D	100	4	0			・明黄褐色砂混じり粘土・累計厚15mm ・走向・傾斜はN47° E45° Wである。 ・傾斜は30°～36°である。 ・上盤境界の傾斜は25°、下盤境界の傾斜は23°である。
			灰褐色		D	100	5	0			●52.72～52.81m ・破砕部である。カクレーサイトからなる。
			灰褐色		D	100	4	0			・灰白色の硬質粘土～明褐色の粘土混じり礫状を呈する。
			灰褐色		D	100	2	0			・灰白色硬質粘土・累計厚10mm ・走向・傾斜はN15° E82° Eである。 ・傾斜は14°である。 ・上盤境界の傾斜は56°、下盤境界の傾斜は44°である。
			灰褐色		D	100	1	0			●53.11～53.22m ・破砕部である。
			灰褐色		D	100	1	0			・正断層センスである。
			灰褐色		D	100	2	0			・灰褐色の砂混じり粘土状～明褐色の粘土混じり礫状を呈する。
			灰褐色		D	100	1	0			・灰褐色砂混じり粘土・累計厚2mm ・走向・傾斜はN27° E64° Wである。 ・傾斜は29°である。 ・上盤境界の傾斜は29°、下盤境界の傾斜は27°である。
			灰褐色		D	100	6	0			●59.82～59.85m ・破砕部である。(D-1破砕帯)
			灰褐色		D	100	5	0			・正断層センスである。
			灰褐色		D	100	2	0			・灰褐色～灰白色の粘土状～灰褐色の粘土
			灰褐色		D	100	4	0			

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
84	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級及びその区間については、“岩級区分”欄に示していることから削除。 ・岩組織や割れ目の残留状況については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。 ・割れ目沿いに砂状化するが、周囲の岩盤に劣化が認められないため削除。 ・硬軟、風化や変質を伴う岩盤の劣化については、岩級区分に含めて示しているため削除。 ・割れ目の傾斜、割れ目の密着状況、色調、割れ目の挟在物の有無、鉱物脈、マンガンについては、補足的なものであるため削除。 ・一部で粘土を挟在するが、連続性に乏しいことから削除。

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

層位 (m)	深度 (m)	境界 数値位置	地層 名	地層 記号	細区分			最大 粒径 (mm)	破砕 区分	記事 ・破砕性状・詳細スケッチ等
					粘土 質	砂	石 英			
85	52.72									85 ●52.72~52.81m: 破砕帯(主せん断面52.81m)
86	52.80									86 52.72~52.80m: Hj 上端56°で直線的に、下端14°で波打って連続。φ5~10m/m岩片(硬さ「D」主体)と岩片間の幅1~2m/m脈状~φ2~5m/m斑点状粘土部からなる。全体的に「粘土混じり岩片状」を呈する。色調は明褐色(7.5YR7/2)、厚さ40~90m/m
87	52.81									87 52.80~52.81m: Hc-2 14°で上端は波打って、下端は直線的に連続。φ1~2m/m石英粒、φ2~3m/m粘土化岩片を10~20%含む軟質粘土(ガウジ)。色調は灰白色(7.5YR8/2)、厚さ7~10m/m
88	52.80									88 52.80~53.17m: D
89	53.17									89 ●53.17~53.22m: 破砕帯(主せん断面53.17m)
90	53.17									90 53.17m: Hc-2 29°で上下端とも直線的に連続。φ1~2m/m石英粒を10%程度含む軟弱粘土(ガウジ)。色調は灰褐色(7.5YR6/2)、厚さ2m/m 53.17~53.22m: Hj 上端29°、下端27°でいずれも直線的に連続。φ5m/m前後の粘土化岩片と岩片間の粘土~砂状部からなり全体に「粘土混じり岩片状」~「粘土質岩片状」を呈する。上端側と下端側はマンガン銹染部を伴ない黒褐色化する。色調は明褐色(7.5YR7/1)、厚さ40m/m。

記事内容
85 ●52.72~52.81m: 破砕帯(主せん断面52.81m)
86 52.72~52.80m: Hj 上端56°で直線的に、下端14°で波打って連続。φ5~10m/m岩片(硬さ「D」主体)と岩片間の幅1~2m/m脈状~φ2~5m/m斑点状粘土部からなる。全体的に「粘土混じり岩片状」を呈する。色調は明褐色(7.5YR7/2)、厚さ40~90m/m
87 52.80~52.81m: Hc-2 14°で上端は波打って、下端は直線的に連続。φ1~2m/m石英粒、φ2~3m/m粘土化岩片を10~20%含む軟質粘土(ガウジ)。色調は灰白色(7.5YR8/2)、厚さ7~10m/m
88 52.80~53.17m: D
89 ●53.17~53.22m: 破砕帯(主せん断面53.17m)
90 53.17m: Hc-2 29°で上下端とも直線的に連続。φ1~2m/m石英粒を10%程度含む軟弱粘土(ガウジ)。色調は灰褐色(7.5YR6/2)、厚さ2m/m 53.17~53.22m: Hj 上端29°、下端27°でいずれも直線的に連続。φ5m/m前後の粘土化岩片と岩片間の粘土~砂状部からなり全体に「粘土混じり岩片状」~「粘土質岩片状」を呈する。上端側と下端側はマンガン銹染部を伴ない黒褐色化する。色調は明褐色(7.5YR7/1)、厚さ40m/m。

標尺	深度	柱状	岩種	色調	岩級	コア採取率	最大コア長	R	Q	D	最大コア長	記事
m	m	図	区分	調	区分	(%)	(cm)	(%)	(%)	(%)	(cm)	
					CL'	100	8	0			85~87	●52.72~52.81m ・破砕帯である。カタクレーサイトからなる。 ・灰白色の塊状粘土~明褐色の粘土混じり砂状を呈する。 ・灰白色塊状粘土: 累計厚10mm ・走向・傾斜はN15° E32° Eである。 ・傾斜は14°である。 ・上盤境界の傾斜は66°、下盤境界の傾斜は14°である。
					D'	100	4	0				
					D	100	2	0				
					D'	100	1	0				
					D	100	1	0				
					D	100	2	0			89, 90	●53.17~53.22m ・破砕帯である。 ・正断層センスである。 ・灰褐色の砂混じり粘土~明褐色の粘土混じり砂状を呈する。 ・灰褐色砂混じり粘土: 累計厚2mm ・走向・傾斜はN27° E64° Wである。 ・傾斜は29°である。 ・上盤境界の傾斜は29°、下盤境界の傾斜は27°である。
					D'	100	5	0				
					D	100	4	0				
					D'	100	2	0				
					D	100	4	0				
					D	100	3	0				

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
85~87	<ul style="list-style-type: none"> ・カタクレーサイト主体であると判断したことから、カタクレーサイトからなると記載。 ・表現の見直し(粘土混じり岩片状→粘土混じり礫状) ・φ1~2mmの石英粒、φ2~3mm粘土化岩片を10~20%含むとの記載に基づき、礫混じり粘土状と記載。 ・粘土の累計幅については、最大値を記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率については、補足的なものであるため削除。 ・破砕区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hj区間の幅については削除。 ・境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。
88	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級とその区間については「岩級区分」欄に示しているため削除。
89, 90	<ul style="list-style-type: none"> ・薄片観察の結果で得られた最新活動面の変位センスを記載。 ・表現の見直し(粘土混じり岩片状~粘土質礫状~粘土混じり礫状) ・φ1~2mm石英粒を10%程度含むとの記載に基づき、砂混じり粘土状と記載。 ・ポアホールテレビの解析結果による最新活動面の走向・傾斜を記載。 ・破砕部の見かけの傾斜については、補足的なものであるため、端部及び主せん断面で取得したものを除き削除。 ・主せん断面との記載については、コア観察による最新活動面を示したものであり、申請書では記載しないこととしているため削除。 ・粒径、粒子の種類、含有率、マンガンについては、補足的なものであるため削除。 ・破砕区分Hc-1及びHc-2からなる区間の累計幅を記載することとしているため、Hj区間の幅については削除。 ・境界の直線性、硬軟については、申請書では記載しないこととしているため削除。

H27-B-1

コア観察カード (H27年8月)

コア観察カードの仮ワープロ変換

申請書用柱状図

標尺 (m)	深度 (m)	標準 層位置	地質 分類	細区分					岩 質	RQD	岩 質 分	軟 弱 度 分	記事 番号
				割れ目 の 傾 斜	割れ目 の 方 向	割れ目 の 長	割れ目 の 幅	割れ目 の 深					
05												91	

基盤岩コア観察カード
記事・破砕性状・詳細スケッチ等

53.22~53.45m: CL
20~30° の直線的な割れ目が多い。
53.45~53.54m: D
締った砂状を呈する。岩組織と一部の割れ目は残留。
53.54~56.66m: CL
53.87~54.10m 石英が多く晶出しφ10~20m/m斑点状~幅5~15m/m・45~65° の脈状で分布する。
54.00~54.60m 石英脈ないし割れ目ぞいに砂状化し、全体がやゝ脆くなる。また同区間ではマンガン鉱染も伴ない黒褐色を帯びる。
53.87~54.00m 珪質でレンズ状の石英も分布する。

標尺 (m)	深度 (m)	標準 層位置	地質 分類	細区分					岩 質	RQD	岩 質 分	軟 弱 度 分	記事 番号
				割れ目 の 傾 斜	割れ目 の 方 向	割れ目 の 長	割れ目 の 幅	割れ目 の 深					
05												92	

55.25m 55° のシャープで直線的な割れ目を境とし55.25m~56.66mは硬さ「C」で硬質となる。
ただし、割れ目ぞいの一部では風化で砂状化を伴う。粘土は殆んどはさまない。

56.43~56.47m 35° ~40° 割れ目ぞいに軟化し、硬さ「D」を呈する。

記事内容
53.22~53.45m: CL 20~30° の直線的な割れ目が多い。 53.45~53.54m: D 締った砂状を呈する。岩組織と一部の割れ目は残留。 53.54~56.66m: CL 53.87~54.10m 石英が多く晶出しφ10~20m/m斑点状~幅5~15m/m・45~65° の脈状で分布する。 54.00~54.60m 石英脈ないし割れ目ぞいに砂状化し、全体がやゝ脆くなる。また同区間ではマンガン鉱染も伴ない黒褐色を帯びる。 53.87~54.00m 珪質でレンズ状の石英も分布する。
55.25m 55° のシャープで直線的な割れ目を境とし55.25m~56.66mは硬さ「C」で硬質となる。 ただし、割れ目ぞいの一部では風化で砂状化を伴う。粘土は殆んどはさまない。
56.43~56.47m 35° ~40° 割れ目ぞいに軟化し、硬さ「D」を呈する。

標尺	深度	柱状	岩種	色	岩級	コア採取率	最大コア長	R	最大コア長	記事
m	m	図	区分	調	区分	(%)	(cm)	(%)	(cm)	
					CL	100	8	0	0	●52.72~52.81m ・破砕部である。カクレーサイトからなる。
					CL	100	4	0	0	・灰白色の塊状凝り粘土状~明褐色の粘土混じり砂状を呈する。
					D	100	2	0	0	・灰白色塊状凝り粘土、累計厚10mm ・走向・傾斜はN41° E82° Wである。
					D	100	1	0	0	・傾斜は14° である。 ・上盤境界の傾斜は56°、下盤境界の傾斜は14° である。
					CL	100	1	0	0	●53.17~53.22m ・破砕部である。
					CL	100	2	0	0	・正断層センスである。
					D	100	1	0	0	・灰褐色の砂質凝り粘土状~明褐色の粘土混じり砂状を呈する。
					D	100	4	0	0	・灰褐色砂質凝り粘土、累計厚2mm ・走向・傾斜はN27° E64° Wである。
					CL	100	6	0	0	・傾斜は29° である。 ・上盤境界の傾斜は29°、下盤境界の傾斜は27° である。
					CL	100	5	0	0	●59.82~59.85m ・破砕部である。(D-I破砕帯)
					D	100	4	0	0	・正断層センスである。
					CL	100	3	0	0	・灰褐色~灰白色粘土状~にぶい褐色の粘土混じり砂状を呈する。
					CL	100	7	0	0	・灰褐色~灰白色粘土、7mm ・走向・傾斜はN26° E80° Wである。
					CL	100	5	0	0	・傾斜は22° である。 ・上盤境界の傾斜は22°、下盤境界の傾斜は28° である。

記事	コア観察カード(H27年8月)⇒申請書用柱状図
91, 92	<ul style="list-style-type: none"> ・岩級とその区間については「岩級区分」欄に示しているため削除。 ・割れ目の傾斜、鉱物脈、マンガンについては、補足的なものであるため削除。 ・一部で締まった砂状を呈するが、掘削時の機械割れと判断し削除。 ・割れ目の残留の程度については、岩盤の劣化に関する補足的なものであるため削除。 ・一部割れ目沿いに砂状を呈するが、いずれも連続性に乏しいことから削除。 ・硬軟については、岩級区分に含めて示していることから削除。